



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第896回

R7/2/14

日本に希望はある！

パネリスト：

石田和靖（国際情勢 YouTuber “越境 3.0 チャンネル”）

掛谷英紀（筑波大学システム情報系准教授）※スカイプ出演

澤村修治（編集者・淑徳大学教授）

深田萌絵（IT ビジネスアナリスト）

前田有一（映画批評家）

ロバート・D・エルドリッチ（エルドリッチ研究所代表）

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！2025第896回目の討論となります。今日は、いつものよう

な、あれが駄目、これが駄目、もう絶望的だというようなテーマではなく、私は一時、絶望の告知者とかね（失笑）」

一同「（笑）」

水島「伝達人とか疫病神みたいに言われた時もありましたが、それは本当に最悪の状態とか本当の現実を踏まえないと新しい希望は生まれないという意識の中で言ったつもりですけども、今日は抜け抜けと『日本に希望はある！』というビックリマークと、こういうような形で、色んなことがありますけども、ここは、こういうことをやれば、こうなるぞというような前向きの話もしてみたいということで、そういうことを語って戴ける皆さんにお集まり戴きました。

ということで、今日は世界情勢のことも色々出ると思いますが、そういう意味で、私は楽しみにしております。では、ご出席の皆さんをご紹介します。まず、編集者で淑徳大学教授の澤村修治さんです。宜しくお願いします」

澤村「宜しくお願いします」

水島「澤村さん、実は著書があるのは別の名前を二つ使っているというね」

澤村「ええ、本当に訳が分からなくてすみません」

水島「ここに2冊あります、はい」

澤村「横手という本名で2冊、出しております。はい。今月、出したのがサリン事件の方ですね」

水島「この方は西郷南洲から、こういう幽霊から…」

澤村「そうですね」

水島「まあ色んな幅広い編集者もなさっていたこともあるんでね。こういうことがあるんですけど」

澤村「すみません、訳が解らなくて（笑）」

水島「ここにあるのは、その澤村さんの著書です。はい。というようなことで澤村さんです。宜しくお願いします」

澤村「宜しくお願いします」

水島「そしてエルドリッチ研究所代表のロバート・エルドリッチさんです。宜しくお願いします」

エルドリッチ「はい。宜しくお願いします」

水島「はい。ということでエルドリッチさんは、こっちかな」

エルドリッチ「えーとね、こっちです」

水島「はい。ということでアップを撮って下さい。はい。こういう形で、今日は皆さんの著書も紹介しながら希望の道を探っていくので宜しくお願いします。宣伝になっても構いませんから、色々とかいいう所で言っているんだと言って戴いて構いませんので、宜しくお願いします」

エルドリッチ「はい」

水島「そして筑波大学システム情報系准教授、掛谷英紀さんです。宜しくお願いします」

掛谷「宜しくお願いします」

水島「はい。掛谷さんの本は、これですね」

掛谷「はい。大分前の本で申し訳ないです」

水島「いつも本当に理系の発言者として色々お話し載っていますけど、つい昨日ですか一昨日、正式にロバート・ケネディ・ジュニアが日本で言うと厚生大臣というね、この下に、実は表があるからと、ああ、これです、はい、これですね。これを見て解るように、このトップになったんですね」

掛谷「うんうん」

水島「そうすると、こっちのFDAとかCDCとかNIH、NIAIDですか」

掛谷「NIAID」

水島「ちょっと、この読み方があれですけども、こういうものの一番、上部団体になると」

掛谷「うん」

水島「皆さん、CDCとかファウチとか、色々聞いたことがあるでしょうけれども、そのトップになったっていうことは、かなり世界の公衆衛生、コロナの問題から始まった、こういうものにも大きな影響を与えるんじゃないかということであります。ということで、掛谷さん、宜しくお願いします」

掛谷「(礼)」

水島「そして国際情勢YouTuber“越境3.0チャンネル”石田和靖さんです」

石田「はい。宜しくお願いしまあす」

水島「はい。石田さんののは、ここには出ていないのかな」

石田「あっ、赤いやつです」

水島「赤いやつ」

石田「はい」

水島「ああ、ごめんなさい」

石田「『逆襲の時代』ですね、はい」

水島「ああ、これですね」

石田「そうですね」

水島「こういう本ですね」

石田「チャンネル桜でもお馴染みのモーガンさんと僕と共著ですけど、僕とモーガンさんは勝手に『チャンネル桜のニューエイジ』と自分らで言っていますから」

一同「(笑)」

石田「チャンネル桜に新しい風、吹き込むんだと」

深田「(笑)」

水島「そうですね」

石田「はい、僕もモーガンさんも、そんな感じで言っていますので」

水島「そうですね。かなり過激な風って言っている」

石田「はい、過激です(笑)」

水島「私は大変、喜んでますけど」

石田「はい、ニューエイジです」

水島「はい。宜しくお願いします」

石田「宜しくお願いします」。

水島「そして映画批評家、前田有一さんです。宜しくお願いします」

前田「宜しくお願いします。はい」

水島「はい。皆さん、ご存じの様に前田さんは創立以来、レギュラーで映画批評をしています」

前田「はい」

水島「最初に出会った時に、私の目の前で、リンゴを手でぎゅって握り潰しまして、なんという奴だって思いましたね(笑)」

一同「(笑)」

水島「握力の凄さがね」

前田「チャンネル桜のオールドエイジとして頑張ります」

一同「(笑)」

水島「はい。非常に鋭い映画批評で、毎年、年末になると、前田さんに今年はいいい映画は何だったかと聞くんですけどね。そういう面から、またお話し戴きたいと思います。そしてＩＴビジネス・アナリストの深田萌絵さんです。宜しくお願いします」

深田「宜しくお願いしまあーす」

水島「はい。深田さんの著書は、これですね」

深田「一番、右の方です」

水島「こっちか」

深田「はい。『生きる』ですね」

水島「はい。この本ですね。これは森永さんが亡くなる２週間前ですかねえ、丁度、出演して貰いまして、あの時は顔が赤ら顔だったけど凄く元気だったので、元気そうですねって言ったら、いや、でも数値は物凄く悪いところに行っているんですっていうお話をされて、あの時、居たよね、居なかったっけ」

深田「あ、その時は、ちょっと居なかったんですけども」

水島「ああ〜。でも本当に元気そうで、まさかと思いましたけど」

深田「亡くなられる少し前まで、うちの番組にも出て戴いていたんですが、最初にお会いした時は去年の４月で、本当に、もうガリガリでね…」

水島「そうでしたねえ」

深田「杖をついて歩くのも大変だったっていう状態から段々ふくよかになって、スタスタと杖を持って歩くぐらいまでになって、もう治ったんだなって思っていたら、やっぱり急だったのが本当に驚いたんですよ」

水島「うん」

深田「その著書の中で、倉田真由美さんがね、御主人を亡くされて、こういうことをおっしゃっているんですけど『あの時、こうしてあげたらよかった、こうしてあげたらよかったっていうのが、いつまでも悔やまれる』っておっしゃっていたんですけど、私ねえ、最後に倉田さんが、森永さんの体調が悪いそうで、もし会えるなら最後に、もう一度、会いたいからセッティングしてくれってお願いされていたのに、ちょっと、のびのびになって間に合わなかったということが物凄い心残りになって…」

水島「そうですねえ」

深田「まあ、そういう見送られる側の気持ちと見送る側の気持ちって、皆さんに知って貰えたらなって思っています」

水島「そうだね。『生きる』という本は３人の方、森永さん、倉田さん、そして深田さんの本ですけども、最後まで自分の言いたい主張を、きちっと伝えて、本当に駆け抜けたっていうね。それで、あつと言う間に亡くなったっていう話を聞いて、正に『生きる』姿を示してくれたという気がします」

深田「はい」

水島「はい。森永さんの特集を組みましたけど、我々も改めて、ご冥福をお祈りしたいと思います。ということで、深田さんです。宜しく願います。今日は、このメンバーでお送りします。そういう意味では、森永さんがいつも、本当にこういう難病に当たっても絶対に諦めない希望というもの、生きる姿を見せて貰った気も致します。そういう意味では不治の病に侵されていると言われていた日本（失笑）、でも希望はあるぞという気が致します。

そういう意味で、私は、ここ２週間、アメリカの問題を徹底的にやっているんですけど、日本の自称保守達の壊滅状態。もう全滅ですね。思想的な破産。まあ、これは私の個人的な考えです。ただ、そういうものに気が付かないまでも退化している。自分達が何処にあるかを。そこまで非常に酷い状態になっている。その証拠があの日米会談に於ける評価ですね。あれを１００点満点だと言う人も居るみたいで、私は、茫然自失と言うか（失笑）、予想はしていたけど、ここまでかと思いました。

色々な見方がありますけれども、今回、段々現れて来たのは、実は１５１兆円の投資を約束した。それからＵＳスチールの問題は買収じゃなくて、お金を沢山、出すんだと。いや投資になるというような形。この２５％の関税っていうのは未だ交渉中だと言われてはいますが、例外はオーストラリアだけだっていう話もあります。

あとは何があるかって言うと、インド太平洋構想っていうんですけども、これも、みんなが評価していますが、あの中で、私も覚えているのは一方的な現状維持の変更。でも、ちょっと待てよと。今、一方的に、私は別に意見がありますけど、一方的に変えようとしているのは、トランプさんが随分、やっていますよと。

カナダ、寄こせとか、グリーンランド、寄こせとか、パナマ運河、寄こせとか、ガザ地区は俺のものにするっていうね。これには別の評価を持っていますけども、一方的に見れば現状変更という形になります。もう、そういう時代じゃない。アメリカの中でも全く別の革命が起きているというね。現実的には世界の中でも大変革が起きているという、そのところの自覚を持てば、我々の日本にも希望があるんじゃないかという気が致します。

まず、皆さんは今、この世界、或いは日本をどうご覧になっているか、それぞれのご意見をお聞きしてから議論に入りたいと思います。では澤村さんから、お願いします」

澤村「はい。まず知らない内に最年長者になってしまったというので、ちょっと啞然としているんですけど（失笑）」

一同「（笑）」

澤村「ずっと西部邁さんと一緒に出ていて、ここが西部さんの席だったようで葉巻か何か吸ってビールでも飲まなきゃいけないのかなと思うぐらいで、西部さんが居た時の光景を今でも覚えていています。昔話から入って申し訳ないんですけども、小堀敬一郎先生が居て西部さんと天皇陛下の退位の問題で議論した時は大変、緊張して、さされないかなと思ってやっていたんですが、その私が知らない内に一番、年長者になって、この西部先生の席に座ったっていうことで、時の流れを感じます。

先程、水島代表の前振りに引き継ぐのに相応しいかどうか、ちょっと分からないんですけど、『希望』というテーマですが、実は、私も順調に絶望すべきことが積まれてきた間だという風に思っています。今でもそうです。ただ、やはりトランプさんが、もう一度、選ばれたっていうのが一つのトピックとなる。あとで言いますけど、それは、実は2010年代から行われたことが、ああいう形になったことなので、そういった意味では、ちょっとターニング・ポイント感があるのでね、私も幕末とかのことを調べて本も出しているんですが、変わる時は一気に変わるんですよ。えっと思うぐらいのことで新しい才能が出て来たりして、もしかしたら今がそういう時なのかなっていう感じがしています。

先程、一番、年長だと言いましたけど、解り易く言うと、そこに国連大学ビルがありますけど、私が居た頃、あれが一番、高かったんですよ。凄く目立っていた。深田さんが1年前に森永先生にお会いしたそうなんですが、私は20年前に会っていますので（笑）、その時の長さの違いがありますが、ちょっと長い時の視点で、もしかしたらお話をさせて戴くかもしれません。いずれにしてもニューエイジと言われている新しい若い皆さんとお話し出来て、今日は非常に楽しみにしております。どうぞ宜しくお願いします」

水島「はい。宜しくお願いします」

一同「（礼）」

水島「じゃあ、エルドリッチさん、お願いします」

エルドリッチ「はい。有難うございます。この席に座るのは多分、初めてだと思います。だから正直、納得できていないというか…」

一同「（笑）」

エルドリッチ「うん、ちょっと受け入れないかなあと」

一同「（笑）」

エルドリッチ「はい。というところで、ちょっと発言が混乱しているんですけども、でも基本的に今日のテーマに沿って大きく言えば、二つの話があると思います。ひとつ目が日本には希

望があるということは、やっぱり内側と言うか、日本に存在するものを再評価する人があるので、後程、ちょっと細かく説明します。だから日本には色んなものが足りないという批判があるけれども、そうじゃなくて、実は資源とか人材に溢れていると、私から見れば言えると思う。

それが一つ目の話で、二つ目が、さっき水島社長が言及していたんですけれども、今、トランプ政権で変化、変革、私は革命と呼んでいるんですけども」

水島「革命ですね」

エルドリッチ「そのアメリカに於ける革命は、きっと日本が参考になるものがあると思う。だから、今、トランプ政権の間、日本が勿論、自分達で決めるんですけども、日本がやるべきことを存分にやって貰いたいなあという風に思っています。なので、言いなりにならなくていい時代、もう突破しているので、このチャンスを使って欲しい。という意味で、希望があるという風に思っています。冒頭で触れていたんですけども、資源に恵まれているんですけども、いつも私は悲観的な話ばかり聞いている」

水島「うん」

エルドリッチ「まあ、自然の資源が無いとかエネルギーが無いとか色々言うんですけども、とんでもないです。逆に溢れていると思う。山林もあり水もあり、そのソフトの面で人材は非常に豊富だと、私は思っています。問題は、この資源、或いは、その人材が活かされていないと思う。例えば人間の場合、引き籠りの問題とか、或いは、自殺の問題とかが、残念ながら非常に進んでいる。彼らが活躍できる社会づくりが、やはり、どうしても必要だという風に思っています」

水島「うん」

エルドリッチ「以前、国立大学に勤めていたんですけど、大阪大学だったんですけども、あまりにも官僚的になって私が辞めた2009年の時期、同じ研究科から3人の先生が同時に辞めました」

水島「ああ」

エルドリッチ「一人は本来、彼女が行きたかった大学へ移った。もう一人は東京の大学に移って、私は海兵隊の仕事に移ったんですけども、私自身はどちらかと言えば、あまり大学を辞めたくなかった。海兵隊の仕事をしながら大学の仕事をしたかった。所謂、兼務兼業したかったけれども、大学はそれを許さない。だけれども、そういう時間もあつたし、エネルギーもあつたので、両方の仕事が出来た。そして、海兵隊の仕事の話を教室に持って帰って、大学院生と議論しながら、そこで新しい政策的な提言を纏めて沖縄の仕事に反映したかったけれども、当時、大学はそういった兼業も許さなかった。

そういった社会との行き来した関係は、あまり求めていなかった。それで結局、大学を辞めて海兵隊の方に移ったんですけども、言いたいことは、もっと兼業兼務が出来る様な仕事とか社会じゃないと、みんな、やっぱり辞めていくのではないかという風に思っています。

あと希望がある、人材的に言えば、第一線、各分野の最前線で凄く活躍している日本人が居るけれども、例えば日本国内で、あまり評価されてない、認められてない、或いは国際社会に於いては、例えば英語で発信していない。英語が出来ないから、世界的には知られていない。だから、やはり、それがもったいないという風に思っています。だから、これから、そのような素晴らしい人材がより活躍できる為に、社会的なインフラと共に世界に於いて発信できる基盤を、もっと作るべきだなあと思っています。

あと2点目。トランプ政権に於ける革命を真似する人が居ないんですけども、共通している

課題が、やっぱり多い。言論弾圧の問題とか、或いは強制接種の問題とか利権の問題とか、似ているところが非常に多いので、この４年の内、或いは１２年間の内、やっぱり日本の発展を妨害している勢力、或いは、そのものをどんどん潰していって戴きたいなあという風に思っています」

水島「そうですね。はい、有難うございます。じゃあ、掛谷さん、お願いします」

掛谷「はい。今の話を受けて、日本には優秀な人材が居るけど、あまり取り挙げられていないって、私が優秀かどうかは別にして、この番組とか他の一部で、私は新型コロナ起源を言っていて、ただ海外では、やっぱり、それを追いかけている人って結構、注目されていて、だからテレグラフ誌とかで記事にされるとか海外ではメジャーですが、日本ではそういうことが無かったんです。

ようやくＣＩＡが研究所起源っていう見解に替えて、ホワイトハウスのデビッド報道官が、これを Confirmable Truth だと。研究所起源は確かな真実だと言ったということで、基本的にイーロン・マスクもそうだし、多くの人、もうジョー・ローガンも言っていましたけど、これは、もう確定していると」

水島「うん」

掛谷「あとは事故で漏れたのか撒いたのかどっちかっていうことに今、新型コロナに関して論点が移っていますよね。先程、社長もおっしゃいましたけど、日本時間で言うと、今朝未明にケネディがＨＨＳの長官に正式に就任したということで…」

水島「そうですね」

掛谷「とにかく、私は、この日を待ち侘びていました（笑）。もう本当に今朝から今日は、ずーっと非常に気持ちがいいですから（笑）」

一同「（笑）」

掛谷「そういう一日ですけど、ちょっとアメリカの話は置いておきまして、日本には優秀な人材が居るっていう話は、私もその通りだとは思えますよ。やはり腹立たしいニュースと言えバインドのＩＴ技術者って言うか留学生に３００万円を払うという話で、みんなが怒り沸騰と。いや、日本にも優秀な人はいるじゃないかと。これは、その通りで、日本は数学とか理系の能力は別にインドには負けていませんが、何故、インドの方が目立つかと言うと、彼らは英語が出来るからです」

水島「うん」

掛谷「だから単に数学とか情報の技術ということで言うと、日本の若い人は全く負けていないと思います。私が普段、指導している学生を含めて技術面では本当に私よりも遥かに優秀な学生が山ほど居て、非常に有望な人材が沢山、居ます。しかし、何故、彼らが活躍できないかですけれども、日本のそういうＩＴ技術者ってプログラムをやるのが、とにかく楽しい。だから技術はあるんですけど、それを使って起業しようとかいう野心が全く無い。やりたくない。結局、アメリカってそういうプログラマー上がりで、それを使って何か起業してやろうと…」

水島「そうだねえ」

掛谷「そういった人達とは、グーグルのラリー・ページ（Larry Page）とセルゲイ・ブリン（Sergey Mikhailovich Brin）とか、あとザッカー・バーグ（Mark Elliot Zuckerberg）もそうだし、あそこには沢山、居ますよね」

水島「はい」

掛谷「そういうマインドが無いのでね。例えば、ヒントになるのはラリー・ページとセルゲイ・ブリンは、経営がちょっと苦手だったからエリック・シュミット（Eric Emerson Schmidt）と組むとかいうことをしたと。だから、結局、日本の若い人は、じゃあ、誰かと組んで会社じゃなくて、今迄は大きな会社に入ろうと。そうすると日本ってプログラマーに対して会社が物凄く冷たいんですよ」

水島「うん」

掛谷「まあ、雑巾がけのような仕事だと思っているので、そうするとプログラミングを書く能力は物凄く優秀だけど、プログラマーは給料も安いし、仕事がキツイからSEと言って、自分で書けるんだけど技術アドバイザー系の仕事に行っちゃうっていうパターンが、今迄、結構、多かったんですね。

だからねえ、具体的に会社で言うと、今、USAIDで話題になっているNTTデータとか、ああいうところに行った方が、給料もそこそこいいっていうことで、プログラムも書けるんだけど、それで起業したら物凄く大金持ちになれるかもしれないけど、そういうリスクはとらないっていうのが、日本の優秀なITの学生のパターンだったんですね。

ただ、それが段々日本も貧しくなってきた、最近ベンチャーとかリスク・テイキングなキャリアを選ぶ人も増えて来た。じゃあ、そこで凄く優秀な若い人が居る中で何が必要かと言うと、技術が出来る人と経営が出来る人で若い人同士で組んでやるっていうことを、もう何か今、その土壌が無くて、失敗の例で言うと、ドワンゴがカワンゴと言われた川上和夫（川上量生（かわかみ のぶお））さんでしたっけ、あの人は角川と組んじゃったんですね。だから結局、古い所と組んでガタガタと来た。

だから若い人同士で組んで、技術をやる人は技術をやる、経営をやる人は経営をやるっていう組み合わせが上手く出来ると、若いITの得意な人も活躍できるんじゃないかなあということ今、思っていて、どうやったら、そういうものを作れるかなあということを考えているんですね。

一つ、やはりチャンネル桜の方は歴史とかがお好きだと思うので、何故、日本は技術とか数学が強くなったかっていう歴史的背景を、実は調べたことがあって、日本は高校で微分積分っていうのをやるんですね」

水島「うん。やりましたよ」

掛谷「アメリカとかでは、ほぼ、やらないんじゃないですかね。エルドリッチ先生、高校で微分積分とかやりましたか」

エルドリッチ「ああ、ないない」

掛谷「やらないですね。日本は大体、そうですよ。日本って凄く数学をするので、だから日本人が外国の大学に留学すると、英語は大変だけど数学とか理科は簡単だから、そこで生きていけるっていう具合に言うんですけど、その中で何故、こんなに数学がレベルを上げたのかっていうのは昔、旧制の一高ってありますよね。今の東大の教養学部ですけど、一高の入試の数学の入試問題って、昭和の始めとか大正昭和の始めって物凄く簡単だった訳ですよ。

文系の科目は凄く難しいっていうあれが、いつから、こんなに数学とか難しい事を教えるようになったかっていうのは、実は昭和17年に替わっているんですよ。昭和17年に、ノモハン事件とかで結構、ソ連相手に科学の劣勢を思い知らされて、このままじゃ駄目だということで旧制中学の教科書は微分積分が入って、数学をかなり難しいとこまで教えるようにして、戦争は負けたけれど、そういうもので勉強した人が戦後、多分、新幹線を造ったり高度経済成長を支えたってということで、その遺産の上に今の日本の理系は世界でもトップクラスの教育を受けているっていうことを知って載いて、何とか、そういう若い人が先人の作ってくれた教育

プログラムの上に乗って世界で最上位クラスの教育を受けられているので、それを生かして、是非、活躍して欲しいなあという具合に思っています」

水島「そうですね。前にも色々話し合ったけど17年というのは、私も初めて聞きましたね」

掛谷「はい」

水島「それと江戸時代でも識字率が世界一だったっていうね」

掛谷「うん」

水島「寺子屋とかでね、やっぱり、そのところは凄い話でね。世界一の教育水準。それから江戸は100万人ぐらいの人が居たって言うけど、細かい数字はちょっと不確かですけど、与力や同心、まあ、警察官である岡っ引きは下に居たんだけど、数百人だったということですね。つまり100万人に対して数百人の警察官しか居なかったっていう治安の問題を含めて教育水準とね、町人クラスでも識字率は凄く高かったっていうのは、こういうのがベースになっている。

岡潔さんは数学の世界的な人だって言われているけど、この人は、やっぱり言葉とか情感が大事だと言っているし、実は、ノーベル賞の受賞者が、みんな、悉く言うのは、そのところが優れていると、湯川秀樹にしろ、そういうところを大事にするっていうのがあって、この辺は、エルドリッチさんがおっしゃった人材の問題で言うと、アメリカ軍が昔、言っていたのは、本当かどうかは分からないですけど、将軍はアメリカだと。将校はドイツで兵隊は日本だと。そうすると世界最強の軍隊が生まれるって。

ただ、これは意外と当たっているところがあって、第二次世界大戦とか大東亜戦争の時、日本人の兵隊の識字率が九十何%ですよ。手紙も書くわ、歌も作るわね、それから戦う心とかね、こういうものも非常にノーブレスオブリージュが兵隊の、庶民レベルまでいったというね。こういうことを考えた時、さっきエルドリッチさんが言った人材の問題っていうのは、そこら辺だけど、でも、今、言ったようにプロデュースする人、纏める人、こういったものが実は日本に非常に少ないんじゃないかっていうね。それで金儲けしようという人も中々居ないんじゃないかっていうところがあって、そういう中での希望の星、石田さん」

石田「ああ、そういう繋がりですか（笑）」

一同「（笑）」

石田「何かちょっと無理くりな感じが（笑）」

一同「（笑）」

石田「そうですね、『日本に希望はある』っていうテーマですけど、希望は結構、沢山あると思うんですよ。その中でも、さっき、エルドリッチ先生がおっしゃっていた資源と人材っていうのは、やっぱり直ぐにでも動くべきだなと思って、まず一つの資源、天然資源ですけど、日本は石油も天然ガスもメタンハイドレートもあるじゃないですか。それらが何十年経っても、ずう〜っと試掘段階っていうことが続いていて、恐らく何処かからの圧力だと思うんですけど、表向きは採算が合わないとか初期費用が掛かり過ぎて中々、商業ラインに乗せられないとか言われているけど、いや、でもウクライナに何兆円も払うお金があるんだったら、そんなもの一気にやっつけてしまえと思うんですよね。

まず、日本は石油って言ったら第7鉱区、サウジアラビアのガワール油田を凌ぐかもしれないと言われているぐらいの油田もありますし、茨城県沖にも天然ガスがあるし、宮古島沖にも天然ガスがあって、日本近海もメタンハイドレートで埋め尽くされている訳ですよ。じゃあ、そ

れが、いつまでも商業生産に切り替えられないんだったら、例えば、僕が石破さんだったら、今回、トランプさんに会いに行ってアメリカに1兆ドル払いますよ、投資しますよとか、LNGを沢山、買いますよとかじゃなくて、トランプに提案をするんですよ」

水島「うん」

石田「例えば、日本には、これだけエネルギーがあるけれども、ずうっと試掘段階で商業生産に切り替えたいんだけど一緒に開発しないか、アメリカ、儲かるぞっていうとかね。トランプさんって政治屋さんじゃなくて、結局、株式会社アメリカのCEOじゃないですか。あの人は経営者でビジネスマンで商売人だから、そういうスタンスでトランプさんに提案すれば、ひょっとしたら日本近海のエネルギーは数年後に純国産エネルギーの宝物として、何か動き出すことが出来るかもしれない。

だからトランプに、そういう提案をしつつ、それが多分、4年間のチャンスだと思うんですけど、そういうところで動きながら、あと、もう一個が地熱ですよ」

水島「うん」

石田「地熱のこともチャンネル桜で何度か言いましたけど、日本は、世界3番目のエネルギー量を持っている。でも法律の関係で国立公園に発電所を造っちゃいけないとか、あとは温泉協会とか自治体とか原子力発電村とか色んなところの利権とか既得権益があって、地熱は中々促進されて行かないけど、でも地熱っていうのは、天候に左右されないエネルギーで、日本にはエネルギー量がふんだんにあって、しかもアイスランドとかインドネシアで活躍している地熱発電所って全部、日本の技術ですよ」

水島「うん」

石田「技術もあって資源もあって、あとは掘って動かせばいいだけの話が、いつまで経っても動かないっていうのも問題ですよ」

水島「うん」

石田「そのあたりの投資についても、もしトランプにとって儲かる話であれば、トランプさんに提案することが出来たと思うんですよ。そういう日本のエネルギー、石油、ガス、メタンハイドレート、地熱の4本柱を、まず純国産エネルギーとして確立させようっていうのが、この4年間の一つの希望ですよ」

水島「うん」

石田「もう一個が人材投資ですけど、エルドリッチさんがおっしゃったように、やはり日本は人材の凄い宝庫です。そういう人材投資、教育投資、そういうところに投資をするべきであると思うし、でも、やっぱり、その一方で掛谷先生がおっしゃったように、優秀な人材は居るんだけど、中々ビジネスを起こしたり、起業したりする人が少ないっていう、要はチャレンジする土壤が、やっぱり日本には足りないと思うんですよ。で、何かチャレンジして失敗したら叩かれるみたいなね、そういうような土壤があるから、それをチャレンジし易い環境をつくって整えていくっていうのも、一つ、日本の大きな希望として光が見えるんじゃないかなあと思うんですよ。

やっぱり、まず政治は、とにかく我々は選挙に行って一票を投じるしかない訳ですけど、とにかく今の日本のリーダーって政治屋さんじゃないですか。二代目、三代目とかで親から受け継いで政治をやっている方々です」

水島「そうですね」

石田「自分らで1万円を稼いで、自分で申告書つくって税金を納めた人が殆ど居ないと思うんですよ。税金を納めることの大変さとか1万円を稼ぐことの大変さとか、一回、自分で商売をやってみろっていう感じのことを、僕は思っているんだけど、今、世界の保守派のリーダーって、やっぱり結構、苦労されている方とか、ビジネスされて来た方とか、そういう方々が今、トップに立っているんですね。

そういう方は国民の方に目が向いていますし、1万円を稼ぐことの大変さというのを痛感していますから、やっぱり、そういうリーダーに日本も替えていかなきゃならない訳ですよ。そういう人達が上に立ってくれば、今言った教育投資とかエネルギー投資とか、結構、喫緊の課題として取り組んでくれるんじゃないかなあと思うんですね。以上です」

水島「なるほど。はい、有難うございます。では、前田さん、お願いします」

前田「はい。そうですね、まあ、ちょっと手短に、映画とかコンテンツ・ビジネスの状況がどうなっているかっていうことだけ言いますけど、やっぱりコロナ禍で世界中の映画ビジネスが一回、リセットされたような状況になったんですね。今は何が起きているかって言うと、そこから立ち上がった国々が勝ち組ですよ。立ち上がれなかった国っていうのがあって、これが負け組で、それが、はっきり去年あたりに出て来たっていう状況ですね。

勝ち組の方は簡単で、まずアメリカですよ。当然、コロナ禍でも配信ビジネスを大きくして映画館の方も大分、戻って来て興行収入も上がって来ている。もう一つ言うなら日本ですよ。日本は、ほぼコロナ前の水準に戻って、それどころか映画会社によっては、過去最大の収益を上げたりしている訳ですね。日本もかなり勝ち組です。

負け組は韓国ですよ。これは、もうコロナ前はアメリカのアカデミー賞を韓国映画が取って、正直、パラサイトですけど、まあ、悔しいと言うよりは残念でしたよね。ああ、先を越されたなあ。う～ん、何か日本がとるべき歴史とか実力があったのと思ったんですけども、結局、そういうことになってエンタメの方でもどんどん追い越されて、もう、これは追いつけないなあぐらいになっていたんですけど、コロナ禍をもって、彼らは本当に大ダメージを受けて全く立ち上がれる気配が無いというのが今の状況な訳ですよ。

そうすると、やっぱり、そこに世界の映画市場は成長はしていても椅子の数っていうのは急には増えないですから、空いた椅子に誰が座るかっていう問題になって、そこで、結構、注目されているのは同じアジアで、まあ、韓国と同じか、それ以上に優秀な映像制作業界があり、歴史もあり原作もありという日本が注目されているっていう状況だと思います」

水島「なるほど」

前田「それが今、日本に希望があるというテーマから僕が思い浮かんだ状況です」

水島「なるほどね」

前田「はい」

水島「中国が出なかったけど、中国はどうなんですか」

前田「ああ～、さすが、そこを突きますよね(笑)。僕は敢えて言わなかったんですけど、中国だけは特殊で、これはトランプさんとハリウッドの関係にも関わっているんですけど、結論から言うと、中国というのは非常に内向きになっています。やはりコロナ前は、アメリカにどんどん投資をして、かつてハリウッドはチャイナマネーによって動いているなんて言われていた時代もあった。その頃は、映画会社を買収したりして出来上がった映画は中国人のキャラクターが出て来て活躍するような中国バージョンを作って公開するようなこともあったんですね。もう10年ぐらい前ですけど。

でも、それが色んな理由で今、全く下火になって、どうなっているかって言うと、中国は殆ど自分の国の映画なり、自分の息のかかったハリウッド映画を世界に広めるというような動きは抑え気味ですね。その代わりに自国の市場をどんどん育てて自分の映画を自分の市場で消費して、そこでビジネスを回しているっていう風に変わっています」

水島「なるほどね」

前田「これには色んな理由があります。トランプさんとも大いに関わって来るので」

水島「また、しつこく聞くようだけど」

前田「はい」

水島「インドはどうですか」

前田「まあ、インドも特殊ですけども、インド映画っていうのは、そんな中で独自の道を行っている感じがしますね。インド映画で世界を制覇しようっていうことでもないでしょうし（苦笑）、かと言って、中東では、やはり根強い人気がありますし。でも、やっぱり、ハリウッドのやり方が入って来ているので、かなり僕らのような普通の日本人が観ても、楽しめるエンタメ作品が増えているなあという風には感じます」

水島「本当にインドは独自の映画を作っていましたからね」

前田「そうですねえ。作っている本数は多いですからね（笑）」

水島「はい、そうですね」

前田「ええ」

水島「突然、踊り出すインド映画というね」

前田「ええ、その個性は変わらないですね」

一同「（笑）」

前田「それは守って欲しいですね（笑）」

水島「それで思い出したらね、昭和30年の、内容が違いますよ」

前田「はい」

水島「でも日本の東映の映画とか、ああいうのは結構、多いですよ」

前田「ああ～」

水島「大川橋蔵とか美空ひばりとかね、こういう映画の時代劇はチャンバラをやってね、突然、歌と踊りが入り始めるっていうね」

前田「（笑）」

水島「橋蔵が歌ったり、ひばりが歌ったりとかね」

前田「うん」

水島「最初にインド映画を観た時、それを思い出してね」

前田「ああ」

水島「ああ、こういうミュージカルでもないしねえ、何か…」

前田「(笑)」

水島「でも、当時、日本の映画の観客動員としては最高だったと言われていますけどね」

前田「そうですねえ」

水島「昭和30年のテレビが出る前のね」

前田「はい」

水島「有難うございます。では、深田さん、お願いします」

深田「はい。日本に希望はあるのかと聞かれると、日本って、むしろ希望しか無いんですよ。ね。教育は結構、いいし、知人がアメリカの大学に入ったので、アメリカの大学の話を聞いていると、数学で二次関数をやらされてショックを受けたって。私ねえ、最初、二次関数って何だったかと思いましたもん。中学の2年生ぐらいでやるようなことを態々大学でやるとか、そういうことを聞くと、やっぱり日本の教育って未だアメリカ程、狂っていないなあって思う部分があって、あとは食事は何を食べても美味しい。何処で何を食べても安くておいしいものが沢山ありますし、電車も時間通りに来る。いいところしかない。じゃあ、何が悪いんだって言うと、日本って政治しか悪いところが無いんですよ」

一同「(失笑)」

深田「だって親の教育がちゃんとしているから、みんなのマナーが良くて、やっぱり若い子達も凄くマナーが良くて、行儀がいいじゃないですか。しかも今の若い子達、皆さん、今日はバレンタインデーですよ」

一同「ああ」

深田「バレンタインで、私は今日、若い男の子達が私に花束とか何かお菓子とかを持って来てくれて、ああ、昭和は終わったんだと思いました(笑)」

水島「ああ、そうだ…」

一同「(笑)」

深田「昭和の男達は絶対、くれないけど(笑)」

水島「そうですねえ」

深田「こういうものをくれる良い時代になったんだあっていうね」

水島「うん」

深田「男の子も優しいし、凄く良い国な訳ですよ」

水島「(笑)」

深田「じゃあ、何がこの国をおかしくしたのかって言うと、もう政治家だけです。ということは政治家を何とかすれば、この国は良いことしか起こらない訳です。だってね、今、トランプ政権になり、世界的にもEVは駄目だねっていう方向に向かっている訳ですよ。EV駄目だねってなったら、日本車が売れるしかない訳ですよ。そうすると未だにガソリン車は2035年に禁止しましょうなんていうことを掲げている政治家の政策を覆せばいいだけだね」

水島「うん」

深田「他には日本車は売れる要素しか無い訳です。もう世界的にもEVは要らないっていう方向になっているので、それを私達の力で…私達の力って言っても、ちょっと、あれですけど、我々世論がしっかりすれば政府ってムチャは出来ないんですよ」

水島「うん」

深田「ガソリン車ゼロにするって言って、そのあと、この国の経済成長をどうするつもりなんだ、説明しろっていうことを、ちゃんと国民が迫れば変わると思うんです。私はLGBT法案の時も運動したんですけど、やっぱり運動すると、政府も、ちょっとビビるんですよ」

水島「その通りだね」

深田「あの時は多くの方のお力をお借りして、みんなでチラシを50万枚も配って、みんなで署名活動をしたんです。その結果、LGBT法案の中に留意事項っていう、全ての国民の安心できる生活を留意するっていう一文が入ったお陰で、女性や子供達の権利もちゃんと守られるような形の法律に着地が出来たんじゃないのかなって思っているんです。

そういう風な経緯を見ると、自分達が政治家になるっていうことは無くても法律って変わるし、国民の声を反映しないとヤバイんだっていうことを政治家に解らせる力って、実は、私達が持っているんだって思ったんですよ。

あと、掛谷先生がおっしゃっていたビジネス・マインドが無いっていうことですけど、これも政府に潰されているんですよ。何故かと言うと、資金調達が物凄く難しい国なんです。私は銀行に借入れに行ったことがあるんですけども、2015年に銀行借入れを起こそうとした時に、審査で融資係の人が出て来て夫は居るんですかと。ご結婚されていますかと。いや、別れたので結婚していませんと…」

石田「そんなこと、関係ないじゃない」

深田「そう、そうよ」

石田「なんで、そんなことを聞いて来るの」

深田「だって別れた夫から、あのうねえ…」

石田「余計なことだよ」

深田「余計なお世話でしょ。慰謝料を貰っているんですか。この会社は、誰が経営しているんですか。私が社長やっちゅうねん、みたいなね。貴方は誰に養われているんですか。男は何処に居るんだっていうように、ずう〜っと男、男、男。慰謝料を貰ったのか、マンションを貰ったのか」

石田「何、それ」

深田「男から金を貰っているのか、みたいなね」

水島「ああ〜」

石田「屑だな、その銀行」

深田「そうですよ。2015年ですよ。10年前ですよ」

エルドリッチ「何ていう銀行ですか」

一同「(笑)」

石田「言っちゃえ、言っちゃえ」

一同「(笑)」

深田「私の嫌いな東京シティ信用金庫という会社ですけども」

石田「酷いねえ」

深田「そう」

石田「ねえ」

深田「だからね…」

水島「本当に、そういうことあるんだ。う～ん」

深田「そうですよ」。

水島「う～ん」

石田「凄いなあ」

深田「コロナの時に、また東京シティ信用金庫から電話がかかって来て、あなたが本当に働いているかどうか判らないから、仕事をしている姿を見せてくれと言ったんですよ」

一同「(笑)」

深田「金融庁からの指導ですとか言って、絶対に嘘ですよ」

水島「ああ」

深田「それで、すみません、今、コロナでオフィスを撤退して自宅でやっているんですよと言ったら、私の家に来て私の隣に座って私が仕事をしている姿を見せてくれって言うんですよ」

石田「マジでっ！」

深田「そうですよ」

石田「そこまでやるの」

深田「そんなこと言われたこと、ありますか」

石田「ないない、ない」

水島「それは、あり得ない話だねえ」

石田「あり得ないですねえ」

水島「うん」

深田「本当に、そういうハラスメントが横行しているし…」

石田「それ、ハラスメントだよ。それ」

深田「お金、借りられない」

前田「それ、萌ファンですね、それね」

深田「いや（苦笑）」

石田「萌ファンなんか」

深田「気持ち悪いですよ、でも、そういう話をすると、やっぱりコメント欄に離婚したら貸し剥がしに遭いましたっていう女性が結構、居たりもして、そもそも起業家にとって、お金が借り難い国なのに、女性起業家には、もっと冷たく当たられる」

一同「う〜ん…」

深田「これ、理不尽だと思いませんか。理不尽なことが起こっている。しかも、日産の子会社の社長とアポをとって会いに行こうと思ったら、経産省が電話してきて深田萌絵とは会うなっていうんですよ」

水島「えっ、経産省が？」

深田「そうですよ。そうやって、こっちのビジネスを潰しに来るんですよ。深田萌絵は、煩いので深田萌絵と会って欲しくないっていう形でね」

水島「なるほど（苦笑）」

深田「我が国の経産省が、起業家のビジネスを潰しているんですよ」

水島「う〜ん…」

深田「政府が無くなったら、この国はもっと良くなります」

石田「よくなる。よくなる」

深田「絶対に良くなる」

石田「居ない方がいいですよ」

水島「う〜ん、ねえ」

深田「ほんとにねえ、政府が起業家をね、ビジネスを潰しているんですよ。だって、償却資産税っていう阿呆らしい税金があるんですけども、20万円以上するものを買うと、10年かけて消費税とは別に儲け10%ぐらいを払わされるんです」

水島「えっ、そうなの」

深田「そうですよ」

水島「ふう〜ん」

深田「なので、こういうカメラの機材とか焼却資産税の…」

水島「ああ、そっちの方のね」

深田「対象になっているんですけど、これってGHQが日本に課した呪いですよ。この国では中小企業が成長できないように足枷かけられているんです。これってアメリカ本国では、この償却資産税があると、企業が成長しないから、もう、やめましょうよと言って殆どの州でやめになっているんですよ」

水島「うん」

深田「それを続けて我々中小企業からお金を搾り取り続け、消費税も上げるっていうことをやっている政治、政府以外、この国には何も悪いところは無いです」

水島「うん」

一同「うん、うん」

深田「もう、この国には政府以外、希望しかありません」

水島「なるほど。はい（笑）」

一同「（笑）」

水島「中々実例があって説得力があるけど。はい、どうぞ」

エルドリッチ「正に今の話はトランプがずうっと言い続けていたことで、やっぱり物凄く一致している。彼は経営者だったので政府は邪魔するものだと、ずうっと言い続けていたので、だから人員削減する、予算のカット、ないし、その監査、調査をする。うん。だから深田さんは将来の総理大臣です」

深田「そんなことないです（苦笑）」

一同「（笑）」

水島「本当にねえ、今回のUSAIDのやっていることとかね、NEDとか、これはネドというのか何ていうのか…」

深田「ネドです」

水島「ネドでいいのかな。言い方が色々あるけど。色んな意味での枷をやっていたとか、或いは金を使って色んな工作をしていたとか、こういうのを今、全部、撤廃するっていう流れになっているっていうことでね、だから教育省もやめるとかね、とにかく日本がそれに対応する親米政権としたら全部、変えなきゃいけない。これは日本の政治のね。それと、やっぱり、我々がちゃんと見ておかなきゃいけないのは、イーロン・マスクがやっている、所謂、行政改革っていうのかな、日本的に言えば。こういうものと、昔で言う日本の行政改革と違うからね。

根本的なところで見方が違うんでね。これも、しっかり見ておかなきゃいけないし、そういう意味で言うと、これを、ちゃんとネタにして日本も本当にドラスティックに変えると本当は面白い日本革命が起こるんですけどねえ」

エルドリッチ「だから親米政権は要らない。親日政権が必要」

一同「（笑）」

エルドリッチ「日本でね。はい（笑）」

水島「よく親米、親米って言うんだけどね、じゃあ、親米だったらトランプの言ったことを全部、うちもやります、うちもやりますってね、WHOもやめますとか、どんどん言えばいいっていうね。そういう意味での皮肉な意味ですけどね、ああ、それと聞いておきたいのは、エルドリッチさんだから聞きますけど、今、一番、特徴的なのはイーロン・マスクがヨーロッパに行ってね、グレート・アゲイン、ヨーロッパ。Make Europa ね。それからインドへ行ったら、今度はトランプがインド・グレート・アゲインね。でも日本については言わなかったんですよ。グレートな国民は居るけれどもね。というようなことを考えると、やっぱり、ある意味で言うと世界戦略的な意味で言うと、やはり日本に対する姿勢というのは、ああいうことで、ちょろっ、ちょろっ、と出るっていうかね。

これまで通りで何でも金を出してくれて言う事を聞いてくれれば、それでいいやっていうね。まあ、結構、横着な意味では、ビンタのひとつも張れば言うことを聞くだろうっていう状態に

なっちゃっているっていうね。だけど皆さんの意見も聞いても判るように、エルドリッチさんが言ったように、これはチャンスでもあると思うんですよね。今、我々がやってみて、どんどん提案してみて、こうやりたいよ、こうやりたいよと言ってみて、駄目だったら、やめればいいんでね。

というような、さっきの地下資源の問題も含めて、それと、もう一つ、我々の国は、実は森の国だから水が凄い。綺麗で豊かな水があるっていうのは、実は中国が物凄く羨むのは水だと思いますね。だから、そういう意味でもねえ、ある意味で言うと、資源に恵まれているって言えば恵まれているんでね、やることは沢山あるっていうことで、皆さん、少し元気になったところで、酷い状態を今、聞いたんですけど」

一同「(笑)」

水島「でも、これは予想以上に凄い事を言うんだね」

深田「いや、そうですよ。JAXA（ジャクサ）と仕事をする時も、離婚した理由を聞くまでは契約書にサインできないと言われましたよ」

水島「はあ〜…あぁ〜なるほどねえ」

深田「JAXA（ジャクサ）の職員に」

水島「ジャクサっていうのは、あの例のロケットのあれだよな」

深田「そうです、宇宙航空の研究所ですね」

石田「こっちは弱者だよ、みたいなね」

一同「(笑)」

深田「そうだよ、上手だね（笑）。そうですよ」

水島「ジャクサと弱者ね。ま、あ、というようなことで、皆さんから色んな意味での希望はあるけれども、ということのを伺ったと思うんですけどね。どうですか、今、聞いて」

澤村「まず若い人が、そういう風に元気で良かったです。本当に歳をとってるんでね、昔の話ですけど、新左翼の革命をやろうぜっていうのが、こんな感じだったんですよ。凄く元気ですね。今、そういう若者が居なくなっちゃったんですけど、久しぶりに見られて良かったです」

深田「いや、若くないです」

澤村「あ、ま、あ、でも感じはそうです」

深田「(笑)」

澤村「ハラスメントに見える。それで、さっき人材の話をしたんですけど、確かに日本には優秀な人材が居ます。大谷のことを見ても解りますしね。まず勤勉ですよ。歴史的に見ても勤勉です。私はコンテンツ産業とか日本漫画史とか出しているので、歴史の話と現在のお話を二つ言おうと思うんですが、まず歴史を見るとね、優れたクリエイターとか表現者が出て来るって、ずうっと平たく出て来る訳じゃないんですよ。

ある時代に、どおっと出て来る訳です。戦後、間もない頃、漫画でしたら、手塚治虫が兄貴分で赤塚不二夫とか藤子不二雄とか出て来た時代があった。一斉に出て来るんですよ。これはね、明治の終わりぐらいにも大体、似たような状況があったんですけども、結局、出版界に居たので、表現の場である出版っていうのは凄く豊かになるんですね。

それで媒体が増えるんですよ。とにかく50年代の終わりから60年代は、出版が月刊から週刊になっていく。週刊少年マガジンとか週刊サンデー」

水島「うん。そうですね、はい」

澤村「週刊ジャンプになっていく。月刊から週刊っていうことは、発表先も4倍になる訳ですよ。そこで新しい才能が出るとか、或いは、実験的な取り組みが許されるとか、そういったことがある訳です。だから、やっぱり発表の場、活動の場を、とにかく設定することは重要だなと思います、一つはね。それは勿論、当時の漫画家達が国からどうのこうのと言われたからじゃないですよ。あんなのは、もう有害図書だとか言われて抑圧された。

当時の首相が国会で言っていたんです。それにもめげずにやったんですよ。やはり、それは発表の場があったからですね。それが、やっぱり大事だっているのが一つ。先程、前田さんから今の日本の映画についての話があったんですけど、コロナ前は韓国ドラマが有力でしたよね。あれは結局、国が深夜枠とかで発表の場を与えたんですよ。そこで、新しい才能が出て来て、それが韓国ドラマの隆盛に繋がっていった訳です。ですから、そういう場を作るっていうことは、やっぱり凄く大事です。

もう一つは、今、藤子不二雄の話をしたんですけど、あの藤子不二雄って二人組の漫画家ですよ。今の若い人は知らないでしょうけど、藤本ひろしと安孫子さん。安孫子さんっていうのは大学を出たあと、何処かの新聞社に就職が決まっていたんですよ。自分は社長になるなんて言っていたんですけど、それで仲間の藤本さんに、一緒に漫画家やろうって言われて、いいよって、それで就職を蹴って来たんです。今なら絶対に無いですよ。新聞社に勤められたのに、それをやめて、どうなるか判らない方にね。

でも当時は何とかなると思っていたと、彼は言っているんですよ。発表の場があると同時に明るいて言っちゃあ、何だけど、失敗したって何とかなるわいと。そういう感じをつくるのが大事だと思います」

水島「うん。そうですね」

澤村「この両方が無くてねえ、お金を出したり、どうのこうのやったりねえ、政治のどうのこうのやっても、やっぱり無理ですよ。表現っていうのは、上から何か言われてコンテンツは出て来ないです。自分で好きでやって、それで失敗してもええわいと。仲間と一緒にやって楽しい。発表の場もあるし、時々好きなことをやらしてくれるとか、そういう環境から次世代の色々な才能が出て来る。出る時はバツと出て来ます。だから、そうなって欲しいなと思います。それが歴史の話。

それで、もう一つね、現在の話ですけど、実はコンテンツ産業っていうのは、非常に強い産業ですよ。コンテンツ産業の世界市場の相場観っていうデータがあるんですが、まあ、これは2022年のデータですけど、世界で一番強いのは鉄鋼産業で、205兆です。石油化学が89兆で、あの有名な半導体は77兆ですよ。コンテンツ産業、このデータだけ古くて2019年ですけど123兆あって、実はコンテンツ産業が鉄鋼の次ですよ。

石油化学や半導体よりも、産業としての規模は大きいんです。それから我が国の産業の輸出額等の規模間比較って、これも日本の相場観であるんですが。やっぱり半導体産業が強いです。5.7兆。鉄鋼が次です。5.1。その次が、実はコンテンツ産業ですよ。4.7兆もあります。つまり実は我が国のコンテンツ産業は強いんですよ。それが今、言った様な、何かちょっと人が出て来ないっていうのは、やっぱり、何とかして欲しいなっていう風に思っています。

それで、最近、まあ、私は研究者でもないんですけど、一応、他の人よりちょっと詳しいので出しましょう。アジアが漫画アニメ・コンテンツの中心にどんどんなりつつあるんですよ。私は政治家さんに会う時に、警鐘を鳴らしているんですけどね。向こうではCAGNっていう概

念があってコミック、アニメ、ゲーム、それからノベル。まあライト・ノベルなんだけど、ライト・ノベルの市場がどんどん下がっているんですけど、これを合わせた制作活動を行っているんですよ。全く新しい形です。

それを、やっぱり国家レベルでフォローして、そういうことをやっている産業の団地なんかも出来ている訳ですよ。そちらの方に人が行っています。実は、私の教え子も、中国資本のアニメ制作会社とかを受けるとか、そういうのが出て来ているんですよ。やはり、これは拙いなあと思うんですよ。もう一つ、漫画は今、コミックっていう言い方になっていますよね」

水島「うん」

澤村「コミックっていうのは、向こうの言葉ですよ。漫画っていうのは、イギリスの大博物館で漫画博をやったように、日本から生まれて世界に普遍していったコンテンツなので、本当は漫画って言葉を使って欲しい。私は本の中では漫画はコミックとカートゥーンっていうね、二つの英語を合わせた日本の言葉。コミックっていうのはコミックをする。喜劇っていう意味から来ているんですが、カートゥーンっていうのはカートゥーン誌であるようにザックリ描くっていうところから来て、両方の意味があって初めて日本の漫画という言葉が出来たんですが、何故か、またコミックに戻っちゃったっていうのは、何か日本のコンテンツ産業は、やっぱり漫画が主ですよ。

あれが映像化されたのがアニメだし、ある種、脚本部分が出て来たのが、ライト・ノベルだし、ゲームっていうのは漫画と非常に深い関係がある訳です。そこが今、コミックになって、中国とか韓国に生産拠点が移って来るっていうのは、非常に憂慮すべきことだと思います。

先程、言ったように、だからと言って政策的にどうのこうのやるんじゃないくてね、発表の場を作るとか、失敗しても何とかするんじゃないかみたいな、そういうメンタルを、ベースを作って導いてあげる。この世界は、上からお金を出すというのはやめた方がいいと思うんですよ。そこに何かやる人が居ないかなという風にいつも考えているんですが、あと10年ぐらいすると手遅れになるかもしれない。

向こうの支払いがいいから、そちらの方にクリエイターが移っちゃって、だから、突然、来ないですから、教えたりする修行期間が必要な訳ですよ」

水島「うん」

澤村「そこを、ちゃんと作っていくということをやるとしたら、今しかないですね。先程、言ったように市場規模とか産業規模としては、実は大きいですよ。世界的な影響力もあります。今、何処に行ったら日本の漫画コンテンツは知られていますから。それはインテリだけじゃなくて大衆が知っている訳ですよ。

例えばドイツで日本の色んなイベント、能とか狂言とか着物とかやると、来るのは大体、インテリというか、お金持ちだけです。それで漫画をやると、コスプレや何かでどっと来て、やっぱり大衆に対する力っていうのは、もう何処でもそうですよ。ヨーロッパもそうだし、中東もそうだし、アフリカもそうだし。確かトルコだったかなあ、漫画を禁止にしたっていうのは、漫画の真似をして高いところからジャンプするとか、ああいうことをするので、それぐらい影響力があるということですよ。

その影響力のある産業が、本当に何か上からどうのこうの言われてじゃなくて、本当に好きでやっていて、これだけ大きくなった産業が今、色んな意味で拙くなっているんで、私としては希望と言うと、やっぱり若い人に、先程、言ったように発表させることが本当に大事です。

それからメンタルの問題、それから先程言った産業の面から、これは、もうちょっと国とか色んなレベルでやると思うんですが、そこを併せてコンテンツ産業の日本が21世紀に非常に強い存在にあり続けるっていうのが、もう一つ大事だになっているのを思っています。

あまり視野に入っていない話かもしれないので一応、言っておきますね」

水島「それは大事な話でね、さっき前田さんにも映画の話をして貰ったけども、やっぱりアニメは世界的になっている訳でね。その時、私が思うのは、例えば浮世絵っていうのは印象派に物凄い影響を与えたとか、こういったものっていうのは、実は繋がっていると思っているんですよ。例えば浮世絵の枕絵という嫌らしい絵だという話になるけど、あれを線で見るとね、一つの線が全部一塊になっていて、自分で発見なんだけども、絡み合っている男女が一塊な訳ですよ。だから男と女が居て何かやっていますっていうね、そういう画じゃないんですよ。

これは、ああ、そうか日本の浮世絵の一筆書きみたいなね、ある種の平面的なイメージがあるけども深みと時間というものを全部、表す。時間とかを、凄く印象派も、そういうのが時間っていうものを絵の中に、レンブラント系の絵から変わってきて光の点だというね、モネにしろ、ある意味で言うと、時間を西洋画でも表すことが出来るようになったっていうことだね。だから、そういう意味で言うと、日本のアニメのベースっていうのは、実は時間性っていうものを凄く持っているんじゃないかと」

澤村「すみません。もう一つデータだけ言わせて戴きます」

水島「うん」

澤村「コンテンツの海外進出の日中韓比較っていうデータがあるんですよ。これでアニメを見ると、2021年のデータですけど、日本は7.53億ドルですね」

水島「うん」

澤村「中国が0.36で韓国が1.35です。もう圧倒的に日本が優勢ですよ。家庭用ゲームは、日本が205.73億ドルで中国や韓国のは0に近い。これも日本が圧倒的に優勢です。実写映像になると、これは2021年か20年のデータですけど、日本は2.18億ドルで、中国は0.36億ドルです。韓国は7.47。さっき言ったように、この時は、やっぱり韓国が強かったです。

この後、また、ちょっと変わっていますけど。問題なのはPC、スマートフォン向けのゲームっていうジャンルで、日本が19.74億ドルなのに対して、韓国が81.94億ドル。中国はなんと180.13億ドルですよ。明らかに中国が強くなっている。ですから、家庭用ゲーム、我々が昔、やったようなゲームは日本が強いし、アニメも強い。ただ新しいPCですとかスマートフォンのゲームでは、もう明らかに中国が優位になっているんですよ。

あと実写映画は韓国がちょっと優位になっているっていう状況があるんですけど、先程、言ったように、やっぱりコンテンツ産業っていうのは総合的なものです。これはね、実情を知って何とかして欲しいなっていう風に個人的には思うんですよ」

水島「そうですね。だから、今、澤村さんが言っていたことと言うと、私も映画監督として思うのは、金を集めるのが大変な訳ですよ。さっき深田さんの言っていた銀行の融資なんかは、絶対に映画には簡単に出ないですね。殆ど企画書だって読んだって、色んな面白かったって、アメリカの場合は結構、エージェントが居て読む力があって、これは当たるぞとかいうような形で実現することってあるってね、タランティーノなんかそうだったとかいうのがあるんだけど、今言ったように、アニメでやっているアニメーターと言われる人達の過酷な実情を、実は知っているんですよ。物凄い奴隷労働ですよ。ブラック企業も真っ黒けっていうね」

澤村「そうそう、そう」

水島「このぐらいやって、でも、その中から、それでも、みんな、やっているんですよ」

澤村「そうです、そうです」

水島「だから好きだから」

澤村「うん」

水島「だから別に8時間労働で働き方改革なんて全然、思っていない」

澤村「そう」

水島「彼らはね」

澤村「そう。せいぜい生活保護ぐらい貰いたいですよ」

水島「うん。ただ一番、望むのは今、澤村さんが言った場所ですよ」

澤村「うん」

水島「発表の場とかね」

澤村「うん」

水島「映画で言えば、例えば松竹、松竹は無くなったから東宝の撮影所とか今、砧にあるね、あれとか物凄く高いんです。だから本当に普通にやるとしたら、もうテレビ会社とかテレビ局とか、こういうのがお金を出す。大会社がお金を出さないと出来ない。だから、みんな、今、何百万単位ぐらいの小さな規模の映画を作ったりしているっていうこともあるんですね。

そういう場というMAとかね、所謂、マルチ法で言うと、こういうことをやれるようなのが発表の場を作ってあげる」

澤村「うん」

水島「こういうのは励みにはなりますよね」

澤村「絶対に必要です」

水島「うん」

澤村「もう発表の場が無ければ何もならない」

水島「ただ映画製作費を出してやったら、墮落するだけですよ」

澤村「そう。そうだと思います」

水島「そうだと思いますけど。はい、石田さん、どうぞ」

石田「いいですか。今の澤村先生のお話の続きで、ちょっと関連する話ですけど、一つ、面白いモデルがありまして」

水島「うん」

石田「僕がやっているオンライン・サロンで漫画家の女性が居るんですよ。彼女が入って来た時、僕を主人公にした漫画を描いて中東で出版したいんですよって言って来たんです」

水島「面白いね」

石田「それで、いや、自分も漫画の主人公になるんだったらって、やる気になるっていうか面白いじゃないですか。色々エジプトの人脈とかを繋いで」

水島「ああ」

石田「エジプトへ行ったら、あそこは人口1億人の凄い人口大国で、若いボリュームゾーンが凄いじゃないですか。それで漫画が大好きな子が本当に多いですよ」

水島「うん」

石田「それで、エジプトは漫画家を目指しているっていう子が凄く多くて、僕もフェイスブックで、そういう友達は何人居るんだけど、漫画のコミュニティとかやっているんですね。一生懸命、日本語を勉強しているんです。実は、小泉さんっていう漫画家が居るんだけど、彼女の漫画を読んでみてって言って、最初は、僕が主人公の漫画の書き出しの部分を見せたら、これ、続きを見たいです、面白いですって言うので本気で描き始めたんですよ。

そうしたら3年後にね、結局、そのエジプトの若い子達も彼女の事を凄く応援し始めて、こういう出版社があります、ああいう出版社がありますって言うてくれて、エジプトの出版社に繋がったんですよ」

一同「うん」

石田「それでハッピー出版っていうエジプトのスエズ運河の近くにある出版社ですけど、その出版社と何の後ろ盾も無い一個人の漫画家が、別に何処かのプロダクション事務所とか何も入っていないですし、大手の出版社の後ろ盾も何も無いんですよ。ただ、個人で勝負した。それでSNSで繋がって、エジプトの若い子達に、どんどん盛り上げられて、去年、エジプトでデビューしたんですよ」

水島「ほお～」

石田「エジプトの書店に今、積まれているの。『XINOB I』っていう漫画でね。そう、忍びって日本の忍者の漫画ですけど、僕が忍者な訳ですよ」

一同「(笑)」

石田「忍者で、こう名刺を投げたと思ったら、名刺の中にQRコードが書いてあって」

一同「(笑)」

石田「YouTubeのQRコードが書いてあって『和を以て貴しとなす』がテーマで、要は、日本人は戦いではなくて話し合いとか協調で色んな課題解決をしていくんですよおっというのをエジプトで広げていって…」

水島「なるほど」

石田「エジプトの色んな課題解決を進めていくという物語です」

前田「ということは、石田さんがモデルですよ」

石田「そう、僕がモデルです。そうなんですよ。それでね、そこからが、また凄いのが、エジプトで出版デビューが決まって書店に並んでね、その写真をエジプト人の友達を送ってくれたんですよ。じゃあ、これをYouTubeライブで発信しようと思って、僕が主人公の漫画がエジプトの書店に並びましたあって言ったのね。そうしたら、チャット欄に日本語版を読みたい～って言うことがうわあ～っと書き込まれて」

水島「ああ～」

石田「それで、僕も日本語版を読みたいんですよ。貰ったのがアラビア語だから、全然、意味が解らない」

一同「(笑)」

石田「何が書いてあるか解らないんです」

水島「そりゃそうだ（笑）」

石田「僕も日本語版を読みたいんですって言って、じゃあ、どなたか出版社をやられている方が居たら、日本語版を出してくれるところに声をかけて下さあ〜って言ったら、直ぐに5月書房新社さんというところが、うちでやりますってということで…」

水島「ほお」

石田「それで日本語版が出来上がって、小泉さん個人の一人の力でエジプトのコンテンツ・マーケットを開拓して現地の出版社と契約しちゃうっていう凄いストーリーは、かなりエキサイティングですよ。じゃあ、このストーリーも載せようと言って、それを一つの本にして、後半にその漫画の日本語版を載せて出来た本が今日、発売なんですよ」

水島「あっ、そう」

深田「へえ〜」

石田「実は、今日」

水島「今、それは無いね」

石田「え？」

水島「今、持っていないね」

石田「今、持っていないですよお。今日、発売でSNSを駆使してエジプトで本を出したという、そういうタイトルの本ですけど」

澤村「それは電子が発達しているから出来るんですね」

石田「そう。でも、あれは紙ですよ」

澤村「ああ、紙か。電子から紙じゃなくて、紙なんだ」

石田「逆に紙なんです」

澤村「それは凄いなあ」

石田「これってね、何が言いたいかって言ったら、若いクリエイターとかに希望と勇気を与えたなあと思っていて…」

水島「そうだね」

石田「何の後ろ盾も無くても、やる気さえあって、やり方のアイデアさえ考えれば、今、SNSがあるから…」

澤村「そう」

石田「別にサウジだのエジプトだの、アメリカだの漫画に興味がある人は何処でも繋がれる訳ですよ。支援者がどんどん集まって来ると、自然と何か話が大きくなってきて、拳句の果てには、なるせゆうせい監督が、これを映画にしましょうって言っているの」

水島「なるほど（笑）」

石田「これを映画にしたいって」

深田「えー、凄い〜」

石田「『X I N O B I』を」

澤村「凄い」

石田「だから、今年は面白そうな展開になりそうですよ」

前田「その漫画家の方って、何処で漫画のスキルを身に着けたんですか」

石田「元々、趣味で描いていたんですよ」

前田「日本ですか」

石田「日本です。日本で書いていて色んな出版社に出したんですよ。でも、やっぱりね、何かの選考で受かったんだけど、彼女は中学校の頃からお母さんの介護をやっているのね」

前田「う〜ん…」

石田「だから、やっぱり締め切りとかに縛られる仕事が、そもそも出来なくて、じゃあ、何か割と自由に描けるところが無いかなあって海外に目を向けて、手始めにインドの雑誌で連載していたんですよ」

水島「ほお〜」

石田「でも月一連載ぐらいで、バカバツクリースっていうクリケット漫画を描いていて、それで地道に漫画を描きながら、あとは別のお仕事をしながら、お母さんの介護もやりながらと言うんで…」

澤村「それが出来るんです、独学だもん」

前田「じゃあ、その子のベースというのは日本の漫画体験があるんですかね。海外の漫画を読んで、そういう漫画に影響を受けてなったんでは無い」

石田「ああ、じゃない、じゃないです。元々日本。元々日本で、でも日本で漫画家として生計を立てるのは難しいなっていう判断を彼女はしたんですよ」

前田「なるほど」

石田「うん。それで海外に目を向けて…」

前田「僕が、これを聞いたのは、結局、絵の上手い人っていうのは世界中にいっぱい居る訳ですよ」

石田「うん」

前田「勿論、中国なんかは人口も多いから、いっぱい居て、やっぱり、日本とアメリカがトップを走っているキャラクターづくりっていう部分を、中国が物凄く研究して追いかけて来ているんですよ」

石田「うんうん、うん」

前田「でも出来ないんですよ。日本の漫画家さんって、それを別に何処から学んだ訳でもないのに、普通にキャラクターをつくると大勢の人が可愛いと思う。それは日本人だけじゃなくて、それこそ中東の人でも可愛い、或いは、ちょっと自分のことのようにだと感情移入してくれるんですよ」

石田「うん、うん」

前田「こういう能力っていうのは、やはり日本の漫画を小さい頃から読んでいて顔のつくり方とかカットの割り方、もっと言うなら目と目の距離とかですね」

石田「う〜ん」

前田「そういうものが何となく、何となくで恐らく血肉になっているんですよね」

石田「子供の頃から日頃、触れているから」

前田「そう、そうなんです」

石田「ね」

前田「だから日本でメジャーになっていなくても、そういう人がパッと描いたものが大勢に受け入れられるって簡単な様で難しい、多分、数値化できない職人芸だと思いますね」

石田「うん…」

澤村「それでキャラクターについても、今、お話になったんで、ちょっとデータをご紹介しますけど、キャラクターの累積収入世界ランキングというデータがあるんです。これは、ちょっと古いです。2018年のデータですが1位は『ポケモン』ですよ。921億ドル。それから2位が『ハローキティ』で800億ドルです。3位、4位、5位が向こうのコンテンツで5位は『スターウォーズ』です。6位に『それ行けアンパンマン』が入っています。

『ポケモン』、『ハローキティ』、『アンパンマン』を見て解るように、漫画と言っても青年、少年より、もうちょっと小さい人向けの漫画ですよ。実は、これが世界で流行っているんですよ。

石田さんにネタとして、私は言っておきます。実は、中東ではイスラム教の指導者とかが日本の漫画に対して大丈夫かいなっているみたいです。何故かなと思ったんですけど、日本の子供向け漫画って他力本願な訳ですよ」

深田「ああ」

澤村「ね。『どこでもドア』とか『暗記パン』とか努力をしないで誰かが何かをやってくれる。『妖怪ウォッチ』なんかもそうでしょ。何の努力もしないのに勝手に出て来て、どうのこうの。あの他力本願の感じがね、まあ、イスラム教は自力本願だから、けしからん、みたいなムードがあるみたいですよ。

だから、それだけ宗教にも、ちょっとバッティングするぐらい大衆が支持しているんですよ。その宗教的なものよりも日本的な他力本願の方が楽しいみたいになると、これは結構、文化的な一種のパワーみたいなのを示しているってことです」

水島「でも、澤村さんね」

澤村「うん」

水島「イスラムは自力本願って言ってもアラーの全てでしょ」

澤村「そう」

水島「だから、ある種の他力本願でしょう」

澤村「ああ、だから、そうです。あのう…」

水島「禪とかだったら、また自力だけど」

澤村「そう。そうなんですけど、それは神。でも、やっぱり救われる為にはジハードをやるとか自分で何か行動して、それで救われるって言うんですけど、まあ、これは子供向けのコンテンツなので、『どこでもドア』とか『暗記パン』みたいな感じを出しちゃ拙いっていうのはあるとは思いますが。それでも…」

石田「逆に『キャプテン翼』とか、何処へ行っても凄く大人気でね」

澤村「大人気」

水島「ほんと、あれは一生懸命やるからね」

石田「例えばアフリカのスーダンとかは、首都のハルツームっていう所が数年前までは、めちゃくちゃゴミだらけで汚かったんですよ。そこに日本のJICAがゴミ収集車に『キャプテン翼』の絵を描いて80台を寄贈したんですよ。寄贈して尚且つ、日本って何曜日に燃えるゴミ、燃えないゴミって決まっているじゃないですか。その定時定点回収っていうゴミ収集のノウハウそのものも全部、教えたのね」

水島「なるほど」

石田「そうしたらスーダンの人達が『キャプテン翼』の絵が描いてあるトラックが見たいものだから…」

一同「(笑)」

石田「決まった時間にちゃんとゴミを出すようになったんですよ」

水島「なるほど」

一同「(笑)」

石田「それで汚かった町が一瞬で綺麗になったの」

水島「素晴らしいですね」

石田「僕は、その使用前、使用後を見ているからね」

水島「なるほど」

石田「本当に汚かったんですよ。東京みたいな首都なのにあっちこっちゴミだらけで、そのゴミ収集車を導入した1年後とかね、もう見違えるように綺麗になったんですよ」

水島「なるほどねえ」

石田「だから、それは漫画の力ですよ。『キャプテン翼』の力」

前田「そういうものの輸出って結局、価値観の輸出でもあるんですよね」

石田「うん」

前田「だから僕らだと、どうしてもビジネスの面で考えがちなんだけれども、映画にしても漫画にしても外に出していくっていうのは当然、必ず含まれている価値観を輸出するっていうことになるのですね」

石田「生き方とかもね」

前田「そうなんです。ここを考えた方がいい。日本映画の場合だとね、2013年って輸出額が大体1億ドルぐらいなんです。これが10年間で5倍ぐらい増えているんですよ。この急激な拡大って、多分、増やしている方も追いついてなくて、そういう価値観を輸出しているという自覚は多分、日本の映画業界には特に無いですね。ハリウッドは、しっかりあると思いますけどね」

水島「トランプに戻す訳じゃないけども、トランプが『常識の革命』って言っている様に今、まあ、これはドゥーギンとか色んな人が言っているのは、今迄のグローバリズム・リベリズム、こういったイデオロギーで価値観、自由と民主の為にウクライナ戦争をやらなきゃいけないとかね、こういったイデオロギーといったものを、実は日本のアニメというのは、それこそ少年ジャンプじゃないけど、愛、友情、勇気とかね、何かあったじゃないですか。これだけやると、つまり理屈抜きで一生懸命、頑張る奴とかね。それこそ、今、理屈抜きにドアを開けたら、何か出て来るとかね」

澤村「そうそう（笑）」

水島「こういうようなね、つまり今迄、我々がずう～っと教えられて来た戦後の一種のイデオロギーですよ。民主主義だ、自由だとかね、こういうものと、かけ離れているもの、さっきの忍者、石田くんっていうのもね」

石田「（笑）」

一同「（笑）」

水島「結局、イデオロギーは持っているかも分かんないけども（笑）ただ一生懸命、こういうところで頑張る姿とか、そういうものを、やっぱり、そこが日本のアニメの国際性って言うかね」

一同「うん」

水島「それと、やっぱり日本の絵画の持っている何か、そういう共通の人類に通ずるものというね、それを我々が建前で言っているものも、さっき深田さんが政治のことを言ったけども、こんな下らないイデオロギーと言うか、馬鹿な思想と馬鹿で低劣な政治意識の政治家の持っているものに比べたら遥かに、今、言った忍者石田くんの方が優れているっていうね」

石田「それでコンテンツ産業の輸出っていうのは、そこから波及される効果が凄く多くて、例えば『セーラームーン』が大好きな外国人が居る訳ですよ、アゼルバイジャン人とかエジプト人がね」

水島「うん」

石田「彼女らは日本語の勉強を始めるんですよ」

水島「うん」

石田「何故かと言ったらセーラームーンの日本語版を読みたいから」

水島「（笑）」

石田「だから、日本語を学び始めたきっかけが『セーラームーン』が大好きだからとか『ワンピース』が大好きだからと」

水島「なるほど」

石田「それで日本語の勉強を始める日本語学者が凄く増えているんですね」

澤村「ヨーロッパもそうですよ」

石田「そうですね」

澤村「サウジアラビアもそうです」

石田「中東とかアフリカとかで、そういう子達が増えてくると、今度、例えば日本の企業がアフリカに物を売りに行くよってなった時に、現地で彼女らが仕事を手伝ってくれたり、サポーターになってくれたり、マーケティング、マーケットターとしてやってくれたりとかして、日本企業の味方になっていって…」

澤村「そうですね」

水島「うん」

石田「どんどん商圈が拡大していくっていう波及効果があるんですね」

澤村「それで、ちょっと一言だけですけど、先程、絵が上手いっていう話をしましたよね。漫画って絵が上手きやいいっていうものじゃないですよ。美大出た人が、いい漫画家になる訳じゃないでしょう。何が大事かって感情ですよ。その感情をどう描くかっていうことが凄く大事ですよ。感動って言葉があるでしょ。

これは、やっぱりねえ、日本は浮世絵時代から絵と文字を併せて人を感動させる力が上手いんですよ。それが今、世界に広まっているんですね。しかも大人じゃなくて子供向けのコンテンツでしょ。大人も読んでいる訳です。やっぱりねえ、この優位性っていうのはねえ、単に文化の話だけじゃなくて間違いなく産業の話になります。それからソフトパワーの話になります。ですからね、意外に大きいんですけど、先程も言ったように、ちょっと、ないがしろにされていて何とかして欲しいなっていうのは、一応、漫画の研究者で、編集者として、黒鉄ヒロシさんの本を作ったりしていたので、ここで、特に若いお二人に、ちょっと言っておきたいなっていうのがあります」

石田「ないがしろしているどころか、インボイス制度ですからね」

澤村「そうっ！」

水島「そうだな」

石田「クリエイターからも消費税、ぶん取っているっていうね」

澤村「うん」

石田「そんなのクリエイターが、みんな、やめちゃうよ」

澤村「本当は暫くやめればいいんですよ」

石田「うん」

澤村「本当に」

深田「本気で抵抗すれば、インボイスは覆せるんじゃないかって思うんですよね」

澤村「それか、やっぱりねえ、描く場も必要ですけど、食べることに心配しないで創作に集中できる環境って絶対に必要ですよ。バイトしながらね、私も漫画家を知っていますが、漫画家になろうとしているのに、もうずうっとバイトやっていて、へとへとになっている訳ですよ。それじゃ描けません」

水島「そうね」

澤村「だから、そういう環境を3年なり何なり、確実に保障するとか、そこを地道にやるという発想が何故、出て来ないのかなあと、私は思うんですね」

石田「そう。実は、そういう事をやっているのがサウジアラビアですよ」

澤村「そう」

深田「へえ～」

澤村「海外の方がやっています」

石田「サウジアラビアはキッドニーヤっていうアニメとゲームと漫画の経済特区を創っていて…」

深田「へえ～」

石田「もう、そこで活躍するクリエイターは無税」

澤村「そう」

石田「みんな、無税」

深田「無税」

石田「どんなに儲かっても無税」

深田「いいなあ」

澤村「最低限の生活が出来るんでしょ。最低限の。これ、大きいんですよ」

石田「だから世界中から優秀なクリエイターがそこに集まっちゃうんですよ」

澤村「うん」

深田「はあ～」

石田「だから、結局、サウジアラビアは、もうコンテンツ産業の世界的集積拠点っていうことで、今後、新しい経済を作ろうとして頑張っているんだけど、いやいや、本来、それは日本がやるべきですよ」

澤村「そうです。そうやってきたんですけど」

深田「そうそう、そう」

石田「ねえ」

深田「本当にそう思います」

石田「秋葉原とかをコンテンツ産業のフリーゾーンにしちゃったらいんですよ」

深田「そうそう、そう。ほんと、そうですよ」

澤村「その通り」

石田「秋葉原でクリエイト関係の会社やったら、もう、みんな、無税ですよ」

深田「私は本当にコンテンツの力って凄いなあと思っていて、私は、さっき、日本の文化の輸出、価値観の輸出っていう風なことを、みなさん、おっしゃっていたんですけども、私は今、実は陰謀論A Iアニメを作っているんですよ（笑）」

一同「へえ～」

石田「面白そう（笑）」

深田「浙江財閥の陰謀を暴く」

水島「うん」

深田「そういうアニメをA Iで作っていて、私は今、毎日、絵コンテを描いているんですよ」

石田「ふ～ん」

深田「絵コンテを描いていて、今、もう3話ぐらいまで作っているんですけど、これをね、日本の政治の話って、やっぱりねえ、こうやってオジサン、オバサンが集まって喋っていても若い人は観てくれない訳ですよ」

水島「うん、うん」

深田「それじゃあ、アニメで面白おかしくビジュアル化されていたら、みんな、見ちゃう訳ですよ。それを観ている内に段々、ああ、浙江財閥って、こんなに悪いんだあっていうことを学んで貰うっていうコンテンツを作っていて、しかも日本だけが認識してはいけないということで、私は今、英語版、日本語版、中国語版、韓国語版の四か国語で作っているんですよ」

澤村「あっ、それはいいですね。今の漫画の市場は、そちらですから」

水島「いや、それとA Iは反抗しないですか。それは大丈夫ですか」

深田「A I、いや、ちゃんと、あのう…」

水島「結構、反抗して…」

深田「作ってくれます」

水島「この間、うちの仲間と言うか、私に情報提供してくれる人が、例えば、ヒトラーはね、歴史的に極悪人ってなっているけども、それだけじゃないと、悪いところもあるかも分からないけども、経済的にこういうことをやったとかね、その文章を書いて、それをA IチャットGPTで翻訳して下さいって言ったら…」

深田「ああ、GPTですね」

水島「『お断りします』って出て来た」

石田「へえ～」

深田「ああ、そうそう、そう。チャットGPTとかは結構、偏っているんですよ」

水島「いや、だから、あのう…」

深田「はい」

水島「所謂、例の中国のディープシー…」

深田「ディープシークですね」

水島「あれもそうだけでも、それで、じゃあ、何故ですかって言ったら、これは、そういう考え方、歴史的に定着していますからって。それで定着するけど、何が悪いかわかる為にも原文が必要じゃないですかって言ったら、貴方にも一理ありますと。でも、これは、こうだと言って、だから最終的に向こうが翻訳して来た。その代わり後ろにぶあ〜っとヒトラーの悪いところ、ナチスの何が悪いって一緒にくっつけて来てね、添付してきて、それが面白かったの。だから、やっぱりチャットGPTっていうのも極めて政治的なね、ただ議論が出来たっていうのは面白いっていうねえ」

深田「うん」

水島「結局、我々は見えていて、番組で紹介したんだけど、GPTがどんどんやられていく訳ですね。いや、貴方にも一理ある。理屈は解りますとか言って最後は翻訳しちゃったみたいだね」

深田「いや、特にチャットGPTも、ちゃんと後ろは浙江財閥ですよ」

水島「うん」

深田「あれってGPUの上で走っているものなので」

水島「そう。だから大丈夫なのかと思ってね」

深田「私はチャットGPTに『TSMCの創業者は人間の屑です』って書いたら、『そんなことはありません』って出た（笑）」

石田「えっ、マジで？（笑）」

深田「素晴らしい人なんですって言って（笑）、めっちゃ、長い文章がだあ〜って出て来て、やっぱり、この人、犯人だなんて思いましたけど」

水島「そういうのは面白いね（笑）」

澤村「それでねえ、ちょっと一言、言いたいんですけど」

水島「はい」

澤村「まあ、漫画の話になっちゃったら、これで最後にしてもいいんだけど、日本の漫画の表現ってオノマトペとかあるでしょ。あれって翻訳できないんですよ。例えば、こう見て『ふっ』って描いているでしょ。あれを言葉で説明しようとする、物凄く長くなるから漫画にならないでしょ。チャットGPTとか、そういう理系的なものっていうのは、あの表現が出来ないんですよ。それで、あれがあるってことって、私は凄く優位だと思うんですよ。

それは、やはり日本のそういう表現っていうのはデジタル文化とか、それよりも何か漫画を中心とした、まあ、浮世絵からずっと来ています、そういう表現というのは。この歴史っていうのは、何らかの優位性があるって、それが今、世界で評価されているっていうのがあるから、もうちょっと自信を持って背負っていった方がいいかなと私は思うんですね。今日、希望の話でしょ。希望の話ですよ」

石田「澤村先生がおっしゃったことと同じことを、アゼルバイジャン人の女の子が言っていたんだけど、日本語を学ばないと『セーラームーン』の細かいニュアンスが解らないんですって」

澤村「そう。私も何人も知っています」

石田「だからね、英語で漫画を読んでいても、何かモヤモヤ感があるんだって」

水島「ああ…」

石田「だから、みんな、日本語の勉強を始めるんですよ」

澤村「そうです」

深田「へえ～」

澤村「アジア人もそうです。私、ベトナム人も何人も知っていますよ」

石田「日本語の表現じゃないと、もう伝わらない部分が、やっぱりある」

澤村「それでベトナム人とかは、講談社を受けたいから、どうやれば受かるとかと言っていますよ」

石田「うん」

水島「ああ、やっぱり確かに、特に間投詞とかね、あの『ぐわっし』なんて言っただって、もう…」

澤村「『ぐわっし』」

石田「うん、『ぐわっし』って何で訳すんだ」

水島「何十年前は分からないけどね」

石田「『ぐわっし』」

水島「ねえ、『ぎょえーっ』とか色々な言葉があるけれど、あれは難しいよね」

澤村「ええ。結構、凄いですよ。物凄く喚起ですよ」

水島「あれでね、はっきり判っちゃっているから」

澤村「うん」

水島「そうねえ、だから、そういう意味では、色んな表現がありますけれども。掛谷さんはどうですか」

掛谷「あっ、今、かなり漫画の話でしたが、もう一つ、ゲームだと私の分野ですが、うちの研究室の卒業生もゲームのプログラマーが居るので…」

石田「でも凄いですねえ、もうコンテンツ産業の並びですね。映画、ゲーム、漫画と…」

澤村「希望の話ですね」

掛谷「まあ、ゲーム会社にも結構、卒業生が就職しているんですけど、ただ発表の場という意味で言うと、コミケという非常に大きなものがあるので、今、出て来なかったんですけど、昔、うちの学生で、コミケで1本2000円のゲームを1万本、売ったとか（笑）、そういうのは居るんですよ。だけど、さっきPCゲーム、スマホゲームは日本が弱いって話があった時に、プログラマーで物凄く優秀な人、学生は沢山居て、みんな、色々なゲームを作っているんですよ。

うちも、そのあとはコンピューター将棋で結構、上位に行くようなソフトを作ったりとか、自分で、そういうゲーム系のプログラミング出来る人は山程、居ますけど、大体やめちゃうパターン。だからプログラマーになれるってことは、別に他のシステム系の、銀行とか、そういう系も行ける訳ですよ」

水島「ああ、これは何でも可能なんだ」

掛谷「ええ。その技能のベースのラインのところは一緒なので、だから、そういう具合になった時に、だったら、じゃあ、仕事として学生時代で、そういう具合に興味とかでやって結構、稼ぐぐらいの能力があっても、仕事としては、それを選ばないという選択をする人がある。だけど趣味としては続けるみたいな形です」

一同「うん」

掛谷「だから、そういう人達が居て、あと、じゃあ、その仕事にした卒業生も勿論、居ます。やっぱり、さっきの話と一緒に、ゲーム会社でプログラマーの待遇が悪いんですよ。だから、要するに企画とかをやっている上の方の人の給料が良くて、それでプログラマーで、ある会社の入社試験で満点を取るような人でも、所謂、下請けをメインでやるような会社しか行けないと。

だから、どっちかって言うと、早慶の文系を出ているような人が元に居て、そこの下請けをやらされるから仕事もつまらないし、待遇も良くないって、だからアニメーターも似ていると思うんですけど、技術のある人が凄く冷遇されるので、そうだったら、そうじゃない別のプログラミングのスキルを生かせるような仕事に行こうというタイプの人が増えちゃうっていうのがあるかなあと」

水島「ああ、それはあるかもね」

掛谷「PC、スマホゲームっていうのはインフラが要らないので、結局、マンパワーなので中国とかは人が多いから直ぐ作れるっていうのもあると思うんですけど、やっぱり技術がある人がゲームのプログラマーに定着し難い、他の仕事に流れる傾向があるかなあっていうのを、ちょっとプログラミングのスキルのある卒業生を見ていると思いますね」

水島「それ、もったいないよね」

掛谷「はい」

水島「そうだねえ…」

澤村「製作委員会方式とかね、基本的な問題があるんですよね。うん」

水島「丁度ねえ、我々は今、フジテレビの事をやっているんだけど、丁度、私がテレビの仕事をしていた時、フジテレビが急に『母と子のフジテレビ』からガッとナンバーワンになった時は『楽しくなきゃテレビじゃない』というところだったんですよ。私も誘われたけど、あの時、フジテレビが何をやったのかって言うと、日枝体制になって下請けの優秀なプロダクションの人間を全部、正社員にする。だから私も誘われたんですよ。フリーの脚本、ディレクターやっていたんだけど、だから来ないかって言われたけど、私は、そういうのは嫌だから、一瞬、考えたんですよ、給料はいいしね、あとは現場から外されても、どうせ窓際へ行って本を読んで何か書いていればいいのかとかね、そういう横着な考えもあったけどもお断りしたんだけど、さっきの話でね。ただね、やっぱりフジテレビがそれをやったっていうのは、やっぱり急に来たんですよ。

だから勿論、今、GHQの3S政策をフジテレビは電通の第二次韓流ブームで成功して、それで、のし上がったんですよ。韓流ドラマは、月曜日から金曜日の1時から5時まで、全部、やったんですよ。それで我々は抗議したんだけど、でも、その時、私も『いじわるばあさん』っていうコメディの脚本、監督をやったりして『楽しくなければテレビじゃない』っていうねえ、今迄、テレビ局っていうのは教育、報道、教養、娯楽の4つを分散して平均して撮らなきゃいけない。

テレビ朝日は昔、日本教育テレビって言っていたんですよ。NETっていうね。そういうチェンジを考えると、やっぱり、今のコンテンツの話ですけどね、やっぱり人材をちゃんと才能のある人間に、そういう場を与える。そうすると、そこで生き生き出来る」

澤村「その通り」

水島「だからフジテレビが急にばあ〜んっとナンバーワンに、のし上がったのは、はっきり言うどビリだったんですよ。振り向けばテレビ東京って言って、当時、後ろにはテレビ東京しか居なかったんですよ」

深田「(笑)」

水島「ところが今は振り向けばフジテレビになっちゃった訳。テレビ東京も振り向いているからね」

一同「(笑)」

水島「それから、その時、何があったかって言うと日本テレビで製作費、全番組1割削減という馬鹿なことをやった訳ですよ」

一同「ああ…」

水島「みんな、余計にやる気が無くなって、それで、そのあと、また日テレも社外の才能のあるって言うか元気な人間を雇って、私もその時、また誘われたんだけどね、というようなことを、ちゃんと、今、澤村さんが言ったように場を与える」

澤村「そう」

水島「元気な才能のある人は、与えられると力を発揮するんですよ」

澤村「そう。だから横澤彪さんは組合で暴れて干されていたのが、あの時、出て来てね」

水島「うん」

澤村「そういうセンスって必要だと思うんですよ。とにかく、やらせるって言うかね」

水島「うん、だから、そういう意味で言うと、今のフジテレビが駄目になっていると感じたのは、今の社長をやっている連中が、私の編成担当だったんです」

澤村「うん」

水島「今、BSフジの社長をやっている亀山千広君っていうのは編成で私の担当だったんです。日枝さんが編成局長で、何を言っているかって言うと、彼らが我々に言ったのは、下請けのフリーな奴が居たら何か面白いものを持って来てよと。何か面白いもの」

一同「うん」

水島「ね。ところがそいつらが替わって若い世代になったら前も言ったけどF1世代は、こういう志向がある。F2はこうだ」

澤村「そう」

水島「ね。タレントさんは、こういう人がみんなに好かれているから、こういう人を連れて来るのがいいと」

澤村「データ、データになってきてね」

水島「こいつ、馬鹿かと。お前は電通の手先かっていうね」

一同「(笑)」

水島「だから、そういうようなことで、つまり物凄く悪くなっちゃったんですよ」

前田「だから、配信がやっていますよね。結局、地上波のテレビ局で面白い番組をつくった人を、かなり高額で引き抜くとかね。テレ朝のプロデューサーもそうだし、ほら、あの地面師たちを作った大根仁さんだって映画業界でしたけど、結局、かなり長期の大型契約で専属みたいな形で雇われましたからね。

だから、今、テレビ局の人と話をするとか、そういう話が、ぽんぽん出て来ますよね。引き抜きが行われている。そうかと言って喜んで行くという感じでもないみたいですよ」

水島「そりゃそうですよ (笑)」

前田「(笑)」

水島「もう見切っているところもあるから、まあ…」

前田「厳しいっていうのもあるからね、あっちはね。あっちはあっちで (笑)」

水島「そう。昔の場合は、テレビが未だ最盛期だったからね」

前田「うん」

水島「やっぱり、澤村さんが冒頭に言った発表の場とかね」

澤村「そう」

水島「そういうところがあれば、直接的に制作費のお金をあげるとかいうことを国がやったら本当に墮落しちゃう」

澤村「うん。それは絶対、墮落します」

水島「だから…」

前田「めちゃくちゃ、今ね、誰に聞いても、作る人で言うと凄く人手不足だと。それは、何故かと言うと、求められるコンテンツ量の絶対量が増えているのに、クリエイターの方は、そんなに増えないので、やっぱり優秀な人にどんどん仕事が行くので大変だっていうのはありますよね。だから、その意味では発表する場というのは、もしかしたらあるのかもしれないですけど、だからと言って、じゃあ、それに見合った給料って言うか、ギャラが上がっているかって言うと、まあ、一部だけだっていう話は聞きますね」

石田「そんなのでね、例えば漫画を描くだけで収益を得るだけじゃなくて、結構、関連する産業が色々とやれるってということで、今、多様化して来ているなって思って、さっき言った『X INOBI (シノビ Co., Ltd.)』の漫画を描いた小泉清美さんは、エジプト漫画を描きながらエジプトの若い子達に漫画を教えるっていう仕事も出来て、あとはアルジェリアの政府からの漫画フェスティバルの講師として招待されて…」

水島「凄いね、国をまたいでアルジェリアまで (笑)」

石田「そう。向こうの政府から招待されて、国境を超えてアルジェリアまで行っちゃっている訳ですよ。だから、そういう意味で仕事のやり方が結構、多様化しているなって思います」

水島「そうだねえ。日本の場合、そこが硬直しちゃっててね。日本の映画、映画屋さんと言

うか、私もその一員だけど、狭い世界で本当に苦しんでいるっていうね。何か表現したいっていうのは正直、凄くあるんですよ。だから、恐らく若い人達もね、う～ん、それとねえ、一番、横着なのは今、テレビ局の編成やそういう連中がね、もう当たるものしかやらない。

だから吉本興業のタレントを連れて来て、喋らせれば、そこそこ取れる。製作費が安い。数時間で撮ってね、ドラマだと1本1週間かかる訳ですよ。1本撮るのに何だかんだで編集を入れればね。こういうような面倒なのは殆ど無くなって来ているでしょ。まず時代劇のレギュラーが今、殆ど無いでしょう。これは日本の文化にとって凄く良くないですよ」

前田「東映の社長さんが言っているんですけど、結局、時代劇って今、日本以外で受けると言うんですよ。だから日本の国内では勿論、テレビ時代劇って、もう無いんですけど、これからは世界に受けるタイプの時代劇を作る。それがキムタクの織田信長なのかなあとか思っちゃうんですけど、今は、そういう風な方向という…」

水島「『SHOGUN』で賞を取ったんだもんねえ」

前田「まあ、『SHOGUN』は取りましたね。受けることは受けるんですよ、アメリカでも」

水島「あれも別にアメリカ風の武士の姿じゃなくてね」

前田「ええ」

水島「極めて日本的なものを追求したっていうね。だから本物を求めているし、今のインバウンドで来る人達も単なるフジヤマ、芸者じゃなくて、田舎の日本の良さは何かとか、そういうのを求め始めているっていうね」

前田「ああいうのは1本、どうかあ～んと受けるのが出来ると、結構、アメリカのハリウッドって、もう、そこを追いかけるっていうのが必ずあるので、15匹目のドジョウぐらい迄、すくっていく業界なので」

水島「うん」

前田「だから今、結構、内部のメジャーの話を聞くと、凄く日本のコンテンツ、まあ時代劇も含めて、そういうものを上手くやれないかっていう空気になっているそうですよ」

水島「いや、ところがねえ、私が一番、心配なのはね、時代劇をやっていた作家達の原作を読むと、ちゃんと武士道にしろ何にしろ、江戸時代のこととかね。池波正太郎さんだって物凄い江戸の知識人ですよ。だから、あの連中は、そういうものを、みんな、持っているんだけど、日本の今の若手のプロデューサーっていうのは、そういう素養も無かったし、教わっても来なかったから、時代劇を作ると現代風みたいなものでね、だから、一番、嫌なのは山田洋二が作るような時代劇ね」

前田「ああ」

水島「マルクス主義者がつくる時代劇みたいなものばかり」

前田「そうなの（失笑）」

水島「そうなの（失笑）。今風に武士の家計簿とか何かそういうもので、一番、大事なものは刀を持って叩き切るっていうね、この部分が全部、失われるって、まるで、日本国憲法みたくなっちゃってね」

一同「（笑）」

澤村「結局、私も現場にずっと居たので解るんですけど、データっていうのは大事です。デー

タが無くてカンでやるだけでは仕事はずっと出来ません。でもデータとか数字に何かちょっと固執し過ぎて、それで一つの問題が出ている。

例えば、出版で企画をやろうとしたら、今、パブラインとか、どれぐらい売れているかっていうデータで大体、出していくんですよ。あれは金額のデータでしょ。市場は変わるんですよ。だからデータばかり見ていると、市場が変わるっていうことが解らないんですよ」

水島「あのう、全く」

澤村「それで似たようなのばかり来て駄目になっている。例えば、過去のアニメブームとかも何度もブームが起きていて、駄目になっているって時は、似たようなものばかりが量産されて、ある時、パタッと駄目になるんですよ。それは市場が変わるっていう、これも、ある種、基本だけど、どうしてもデータって金額のものだから、それは、やはり販売とかで、そっちの方の上手くいかないっていう感覚が最初にあると、挑戦が出来なくなるんですよ。データを元にしてやるっていうことになる。そうすると金額のデータはデータで、或る時、市場に飽きられてパツッと止まる訳ですよ。それがねえ、何か凄く痩せた感じのクリエイターとか企画に結びついているような感じがするんですよ」

石田「一辺倒になっちゃいますもんね」

澤村「そうです、その通りです」

石田「みんな、同じようなコンテンツになって」

澤村「その通りです、その通りです」

深田「やっぱりデータって過去しか表していないので…」

水島「そうだよね」

深田「未来は見えないんですよ。やっぱりデータで何かを作ると、この延長線上のちょっと先ぐらいの所までしか見えないので、トレンドの変わり目っていうのは全然、見えないんですよ。それって株式投資とかでも統計で解析をずっとやっていたんですが、トレンドをフォローする事は出来るんだけど、トレンドの転換点では確実に大損をするっていう形になるんですね」

水島「そうだねえ」

深田「だから…」

石田「少しあとの潮流を読むっていうのが大切です」

澤村「そうなんです。それねえ、データを超えたものが無いと潮流って読めないと思うんですよ」

一同「うん」

水島「そうですね」

澤村「そこはねえ、やっぱり何か違う発想っていうのを作っていかないと、例えば日本の漫画表現でオノマトペって凄く豊かだけど、あれって説明が出来ないんですよ。データ化しようっていうのは何か、もしかしたら出来るのかもしれないけど、それによってね、あるオノマトペ、ある局面で使ったって絶対に受けないと、私は確信しています。

だから安心してはいるんですけどね。やっぱり人間がやる面っていうのを、もうちょっと、復活させていくみたいなのが、コンテンツ産業、先程、言ったように非常に世界的にも強い産

業ですよ。日本発の非常な強さです。やはり、それを復活させなきゃいけないっていうね、今日、希望の話だから敢えて言いますが、その為にも、今、やらなきゃいけません。もうねえ、段々と日本から外に色々な人材とか出て行って、あと１０年もしたら本当にヤバくなるので、今、本当にやって欲しいなと思うので、若い人に期待します」

深田「いえいえ」

澤村「若くないって言われるかもしれないけど（笑）」

水島「今、言ったように、ちょっと、又、少し戻すような話になるんだけど、渡部昇一さんが日本の歴史について、何故、天皇は、ずう～っと繋がったんだって。それまでは、天皇、朝廷が政治を主導していたけど鎌倉時代になったら完全に頼朝、或いは、北条氏がやる。本当は変わっているはずだけど、だから彼の言っているのは江戸で、また変わっている。明治で変わった。戦後で、また変わった。日本の歴史っていうのは変わらないけど変わっているっていう、変えながら変わらない。これが本質みたいなことを、随分、昔の本でおっしゃっていたけどね。

さっきのコンテンツの話も多分、ウケているのは、そのところがあると思う。その表現は、どんどん色々変わっていくけども、本質の問題は誰でも訴える力は、やっぱり、我々の文化の中に持っているものがあるっていうね」

水島「そこは今、コンテンツの話が色々出たけど、やっぱりエルドリッチさんはアニメはどうですか」

エルドリッチ「はい。実は見ていないんです、はい（苦笑）」

一同「（笑）」

水島「いや、それも、また凄いあれだね」

エルドリッチ「ああ、でも子供の時は勿論、カートゥーンとか、よく観てたんですけど、正直、アニメとかは、あまり理解していない」

水島「うん、うん」

エルドリッチ「でも、やっぱり本当に深い話だと思うんですけども、私の子供達も、もう大人ですけども、やっぱり日本のアニメが大好きだけれども、私自身は、はい（笑）」

水島「（笑）」

エルドリッチ「申し訳ないですけど（笑）」

水島「いやいや、それはそれで一つの立派な見識だと思うんですけど」

エルドリッチ「うん」

水島「まあ、そういう意味で日本のコンテンツっていうのは、そういう非常にいいものを持っているっていうね、それから世界性を持っているっていうね」

澤村「その通りです」

水島「これは、やっぱり凄い事だと思いますね」

澤村「普通、誰でも当たり前のように持っています」

水島「もうねえ、石田さんの話じゃないけどアゼルバイジャン、スーダン（笑）ね、アルジェ

リアとかサウジアラビアとか、もう色んな国が出て来るっていうね」

澤村「そこまで広がった日本文化って無いですよ」

水島「そうですね」

澤村「世界のコンテンツでも無いです」

石田「逆に言うと、そういうところにクリエイターが、まだまだ手付かずですよ」

水島「そうだよな」

石田「それで、その若いクリエイターさんからしてみたら、手付かずの所に行った方が、ブルー・オーシャンじゃないですか」

水島「やれるしね。それで、また日本語を学びたくなるって凄いよね」

石田「そうですね」

水島「それは本当に考えるねえ」

石田「うん。だから、さっき言ったスーダンなんかは、その『キャプテン翼』のゴミ収集車で、あんなことになってるので、例えばやる気のある人であればサッカー漫画でも描いてスーダンの本屋さんに並べるぐらいの感じで…」

水島「う〜ん」

石田「もう突破していけばいいと思うんですよ。振り切っちゃって」

水島「いやあ、だから、やっぱり…」

前田「日本でやるよりチャンスあると思いますね」

石田「チャンスあると思いますね」

前田「日本はレッド・オーシャンですもんねえ」

石田「そうです、そうです」

前田「まあねえ…」

石田「だからスーダンからエジプト、リビア、北アフリカ、ずうっとアルジェリア、チュニジア、モロッコまでね、あの辺りは、もう全部、アラブ圏ですけど日本の漫画が大好きですよ、みんな」

前田「へえ〜」

石田「本当に政府をあげて日本の漫画フェスティバルとかやってるぐらいですから」

前田「そういうところは、やっぱり紙が中心ですか」

石田「紙です」

一同「ふう〜ん」

前田「電子ではない」

石田「電子じゃなくて紙ですね」

前田「ほお～」

澤村「アメリカとかも一部、紙に戻っているんです」

石田「安いんですよ」

澤村「そうそう、そう」

石田「その代わり印刷の品質が、やっぱりねえ、悪いです」

澤村「うん」

石田「何か、わら半紙みたいな紙質でね」

水島「ああ…」

石田「昔の少年ジャンプみたいな感じの単行本なんですよ」

前田「なるほどねえ」

石田「うん。でも、もう、それで、みんな、とっても喜んで読めますしね」

水島「まあ、でも今日一日中、ずっとアニメ論をやる訳にもいかないんですよね」

一同「(笑)」

水島「時間がないんですけど、やっぱり本当は、我々が戦後30年、テレビが始まった時、集中的にアメリカの西部劇とかね。まあ、これは一種の洗脳工作ですけど、ポパイとかね、色々ディズニーの漫画とか本当に色んなものをやった時、何を知らせたかったのかということを考えると、日本のアニメと、どう違ったのか。『サザエさん』とかね、ずうっと続いているのは『ちびまる子ちゃん』とか『サザエさん』、『アルプスの少女ハイジ』とかね、こういうようなものの中で世界性を持ったのもあるんですね。『サザエさん』っていうのは恐らく外は駄目でしょうね」

澤村「不思議ですねえ」

水島「あまり聞いたことがないんだけど」

澤村「そうでもないんですが…」

水島「『アストロボーイ』 ああ、『鉄腕アトム』 はねえ…」

石田「そうそう、そう」

水島「私はフィリピンで売ったことがあるんですよ」

澤村「うん」

水島「自分がフィリピンでケーブルテレビをやっていた時ね」

石田「うん」

水島「あれは『アストロボーイ』として人気があったんです。ただ、やっぱりねえ、そういうコンテンツをやっていくと、何がウケるのかウケないのかね、映画も外国の監督でも非常に小津安二郎を評価するのと、黒澤明を評価する人と、みんな、違う。どっちも優れた監督だけど、っていうようなことを含めて日本を語る時、そういう色んな意味でのコンテンツをやるのはいいんじゃないかと」

澤村「そうですね」

水島「非常に残念なのは小説家で、ノーベル平和賞っていうのは非常に政治的なものだけでも、何故、村上春樹が取れないのか。ね。或いは、谷崎潤一郎が生きていたらどうだったのかとかね」

澤村「うん、そうです。言われていますねえ」

水島「という風に言われることとかね」

澤村「候補になっていたかとかね」

水島「日本のコンテンツが海外で、どう受け止められるかっていうのは我々日本人論でもあるという気がしますので…」

澤村「うん」

水島「さあ、それで、一応、コンテンツの方は、この辺にして、後半は、もう一度、戻りまして、やっぱり、先程、エルドリッチさんが言っていた人的な資源ね。これは今みたいにコンテンツを作る力とか、そういうものがあるっていうのは判るんですけど、もう一つは、やっぱりねえ、別の意味での日本のこれからの生き方、それから、おっしゃったように、私もトランプは革命やっていると思います。これは人類的な革命だと思います。

あまり舐めちゃいけないよと。単なる思い付きで強引にバンバン、バンバン、やっているだけじゃないと。それだけは、ちゃんと捉え切らないといけないっていうのはあると思うので、それが日本の次の希望になると思います。一回、お休みして、皆様のご意見を聞いてみたいと思います。では、一回、お休みします」

一同「(礼)」

<後半>

水島「後半になりました。後半は前半とは違った形の討論を議論したいんですけど、その前に、この真ん中の顔を見て下さい。はい。実は、この真ん中が石田さんですね」

石田「はい。『X I N O B I』の主人公です」

水島「『X I N O B I』の主人公」

深田「絵は似ている」

石田「ああ、似ている？」

深田「うん、似ている、似ている」

石田「ほんと？」

水島「もう一回、顔をパッと拡大して…」

石田「ちょっと格好良く描き過ぎな気もするけど」

深田「ああ、そうだねえ（笑）」

水島「はい、この顔と、こっちの顔。はい」

深田「（笑）」

一同「（笑）」

水島「はい。ということですね。有難うございます。また、出演してくれる時があったら、これ、お願いします」

石田「ええ。本を何冊かお持ちしますので」

水島「お願いします」

石田「はい」

水島「というようなことですけど、さあ、エルドリッチさんね」

エルドリッチ「はい」

水島「掛谷さんとも、そういう話が色々あったんだけど、人間の在り方とか、日本人の在り方を含めて、やっぱり、ある種の教育とか色んな問題を、本当に日本の８０年の戦後教育ね」

エルドリッチ「うん」

水島「今年は戦後８０年、昭和１００年。神戸震災３０年という本当に節目の年ですけど、そこから、もう一回、日本の希望ということ話をしてみたいと思うんですが、どうですか」

エルドリッチ「ふんふん、ふん。今夜、６人の内２人は現役の大学の先生で、私は１５年前までは大学で勤めていたんですけども、教育への関心が、そこで終わったのではなく、ずうっと関心があって、実は私の夢は将来、日本でフリースクールを創りたいと思っている」

石田「おお～」

エルドリッチ「対象になるのは高校生だという風に思っているんですけども、そこで、掛谷先生がお話しされていた起業家精神が日本で中々育てていない状態。あと教育の場で、或いは、そのあとの活躍で学際的に連携することが、あまりやっていない」

水島「ああ」

エルドリッチ「或いは、教えていないということですけども、私が将来、創りたいと考えているフリースクールには、いくつかの柱があるんですけども、それが二つの基本的な柱だと思っています。それに加えて愛国心教育を入れたいと思う。色んな考え方があると思いますけれども、まず、やっぱり郷土愛。自分の故郷に対する愛着とか尊敬、そして理解で、そこから家族に対する、或いは、自分の国に対する歴史に、もっと興味を持つようになる。最終的には愛国心に繋がると思っています。

あと農業を教える学校にしたい。あとは日本の文化そのもの、まあ、茶道、花道、武道、書道、全てのものを教える。そういう学校を目指している。やっぱり日本の現在の教育には、それが全くと言っていいぐらいやっていない。だから、そういう方向を変えなければ、私は将来を非常に心配しています。だから生きている間に必ず実現したいと、私はここで誓います」

水島「なるほど。素晴らしいですね」

エルドリッチ「有難うございます」

水島「今、言ったように、実は今の指摘は誰でも感じているところがあると思うんですよ。それが本当に必要だっていうね。今の教育じゃあ駄目だっていうのがあると思うんですね。私、一つね、掛谷さんが居るから言う訳じゃないけれど、教育テレビで時々やっているのは高専ですか」

掛谷「ああ」

水島「高等専門学校がロボットとか何とか…」

掛谷「高専ロボットコンテストです。はい」

水島「コンクールみたいなね。ああいうのを見ると、チームでやっている少年達が凄く生き生きしていてねえ」

エルドリッチ「はい」

水島「それで何らかの形のロボットを作って、それを競い合うっていうのを見た時、私は、例えば、かつての旧制高校が、みんなで暮らしていたと。一緒に暮らしていたとかね。こういうものも含めて、日本人は一人で自立して頑張れって言っても殆ど難しいと思っているんですよ」

エルドリッチ「はい」

水島「みんながグループとか仲間の中でやると、個性を凄く発揮して才能も発揮する」

エルドリッチ「うん」

水島「独りぼっち、物凄く寂しがり屋の民族でね、孤立を凄く怖がる民族だと思っているんだよね。だから、そういう意味で言うと、今、言ったフリースクールの中でも、みんなで暮らしながらやる、かつての旧制高校の制度とか、それと、さっき言ったように、実は、アニメも切磋琢磨する、何とか荘っていう漫画家が集まったアパートがあったとかね」

澤村「トキワ荘ですね」

水島「ああ、そうですね。ああいうものみたいに、私は、そういう場所をね、学校とか、そういう形の所で作ってあげるっていうね」

エルドリッチ「はい」

水島「独りで頑張れって言っても、それは民族性として無理だっていうことはあるんだけど、掛谷さんは教育者として見ていて、理系を育てる、文系を育てているという意味でもどうですか、今の教育の問題ね」

掛谷「エルドリッチ先生がフリースクールを創る時、是非、協力させて戴きたいなと思いながら聞いていたんですが、私は、やっぱり、さっきの中で、その学際的っていうのは、凄く重要で、日本って高校時代に早くに文系、理系に分け過ぎだと思いますよ」

水島「うん」

掛谷「さっき、深田さんが、例えば会社を興すっていった時に、技術者と組んでやっている方はいらっしゃると思いますか」

深田「え？」

掛谷「起業で、じゃあ、技術者と組んでやろうとか」

深田「私は技術者と組んでやりました。はい」

掛谷「ああ、そうですか。そういうのは何か技術系の起用がし難くて、技術者の人は自分で経営はしたくないみたいな感じの人が多いので…」

深田「でも、そうですね。ほんと、そうです。だから私が経営して、技術者が好きな事をやっているみたいな感じですね」

掛谷「うんうん、うん」

水島「だからプロデューサーとねえ、プレイヤーっていうね」

深田「うん」

水島「纏め役とプレイヤーが、やっぱり役割分担が違うけども、それがちゃんと有機的に繋がってればねえ…」

掛谷「はっきり言って、今のアカデミアは、学際的なことをやるのは物凄く嫌います」

水島「ああ」

掛谷「だから、実は、今、コロナの起源の話をやっていたんですが、コロナの話って総括が必要ですね」

水島「うんうん」

掛谷「多分、アメリカはロバート・F. ケネディ・ジュニアがなって…」

水島「始めるね」

掛谷「あと、さっき表がありましたけど、下にNIHとFDAとあってNIHにはジェイ・バッタチャリア (Jayanta Bhattacharya) が今度、恐らく所長になると。FDAは、今、マカリ (Martin A. Makary, MD, MPH) で、この二人は本当に今迄のことは、間違っただんじゃないかっていうことを学術的、専門的な事を言っていて、かなり総括っていうのは進むと思うんですね。私は今、実は35人ぐらいのメンバーで、学際的にこの総括をするっていうことで、オンライン勉強会を一か月に一遍か二か月に一遍やっています。だから、それこそ文系は経済の先生から倫理系の先生で、理系は分子生物学者も居れば、私みたいなデータ・サイエンティストも居て、まあ、色んな事ですね。

起源の話だけでなく、例の注射の話、その他、色々、あと政策ですね。感染対策の話で、結局、空気感染だったからマスクとか、或いは、ソーシャルディスタンスで意味が無かったっていうのが、今のほぼ科学的な結論になっているんですけど、それをずうっとやっていたっていうことで、やっぱり、これは総括しなきゃいけないと思うんですけど、ただ、そうやって学際的に色んな人が集まって、こういう議論をするというのは、非常に嫌がられます。だから日本の学者の世界って、ある種、職能集団っていうか昔のギルドみたいなもので、だから、私みたいな人間がデータ・サイエンスとかやってきて、ウィルス学会とかに行って、これは人工だろうって言ったら、まあ、本音では、みんな、そう思っているんですよ。だから発表の場じゃなくて休み時間とかで言うと、みんな、賛同するんですけど、表ではそんなことになったら研究費というのが取れなくなるとかプロジェクトをストップするって言うんで、そういう、もう完全に、それぞれの分野がギルドになっているんですよ。

だからエネルギー問題でも、再エネとかで全く意味の無いような技術を進めると。だから全部、ギルドになっていて、そうやって無駄なことを打ち破るには、その学際性っていうのが本当に必要で、ただ今は多分、大学で学際って言いますけど、そういうのは、物凄く嫌がる文化が今のアカデミアにあるので、だけどアメリカって一応、大学4年はリベラルアーツがあっ

て、その文理両方を勉強して、そのあと、大学院になる時に、メディカル・スクールへ行くとか何かするから、だからドクター・ドゥルーっていうアメリカのお医者さんで毎朝、まあ、日本で言う朝ですね、アメリカでは夜だと思うんですけど、ネットで放送している人が居て、だから結局、今回のコロナ禍で、お医者さんが色々間違えたけれども、その大学院のメディカル・スクールの4年間は、日本の医学部と一緒に、とにかく軍隊的に覚えてっていうことをやるけど、その前のリベラルアーツの4年間で物凄く大事だったと」

水島「うん」

掛谷「だから、そこを上手く生かせられなかったのが、やっぱり失敗だったっていうことを言っていて、日本は、その教育なんか、あまり無い訳ですよ」

水島「うん。うんうん」

掛谷「だからエルドリッチ先生がそういう学際的な、或いは、起業家精神、更に愛国心、兄弟愛っていうのは結局、今回のコロナの件って、要するに日本人でも、まあ、推計によりますけど、コロナで13万人が亡くなったって、この前、ここに出演した時もお話しましたが、人工だと思いき特徴っていう中には感染対策とかに生きるような知識は沢山、あったんですよ」

水島「うん」

掛谷「だけど、それを言うと自分の学会とか研究費で予算が削減されるからということで、税金で研究している科学者達が言わなかったんですよ」

水島「うん」

掛谷「要するに今の日本の学者は、税金で研究しながら、彼らには郷土愛も愛国心も全く無い訳ですよ」

水島「うん」

掛谷「それは変えなきゃいけないということで、エルドリッチ先生のフリースクールに本当に期待しております（笑）」

水島「いや、でも本当にそうだね。ただ本当に、そういう学者もそうだしね、みんな、各分野がそうなんだ。経済人もそうだけでも、目先のことだけしか考えないっていう、予算がおりなくなるとかね、そういうのは、実際、解るけども、あまりにも、それが優先されるようになってちゃって、だから今日の希望の話で言うと、絶えず目先のみみっちい希望ぐらいでね、103万円が178万円になるとかならないとかね」

掛谷「（頷く）（笑）」

水島「それで大騒ぎして延々何か月もやっているみたいだね。こういう状態。今、世界は、これだけ変わっているのにね。という様な事を考えると、本当に我々の国の中の知識を持ったというか、少なくとも見識を持たなきゃいけない人達が、物凄くレベル低下している。でも庶民は、ちゃんと真面目に働いて、きちっと何か暮らしをしようとしている。

嘘ついちゃいけないよ、正直に生きようねとかいう極々当たり前の日本の庶民のああいいうもの自体が未だ繋がっているっていうねえ。だから、深田さんがさっき『政治が悪いんです』って言って『他は、みんな、希望、いっぱいです』ってね」

深田「（微笑）」

水島「でも本当に当たっているっていうねえ、所謂、エリートと称している人達がね、ということだけど、もう一つは、やっぱり属国だったからっていうねえ、属国根性の人達が我々の国

を80年間、治めて来た。これは個人の私の意見です。本当に自分の国を自分でね、エリートとして責任を持ってやって行こうとしなかった原因が、やっぱり、そういうことだろうというね。

だから、さっきフジテレビの話で『楽しくなければテレビじゃない』っていうのは、本当にこれで変わったんですよ。私は50年間、テレビをやったから解るけど、この『楽しくなければテレビじゃない』っていう形で3Sのセックス、スポーツ、スクリーン、こういうところで日本の国民が本当にパアになっていくっていうね。刹那的な、いつもお祭り騒ぎで生きているのが楽しいんだっていうね。『今だけ、金だけ、自分だけ』みたいなところへ、本当にもって行かれちゃったってね。別にテレビが楽しくていいんですけども、一体、それだけで本当に毎日がお祭り騒ぎでハレ（晴れ）の日とケ（曇）の日があるという感覚が、もう日本人の中に失われた。

宮本常一さんのね、或いは、柳田國男さんの日本人の本来ある姿っていうのは、今、もう全然、無いですよ。そういうものの自体が、この80年間で無くなっちゃったっていうね。やっぱり、そこは教育で取り戻すしかないっていうねえ、エルドリッチさんは、この日本に居るんでね、特に何処でそれを強く感じましたか」

エルドリッチ「うん。さっきの属国の話で反論させて戴きたい。違う（笑）」

一同「（笑）」

水島「いやいや、言って下さい」

エルドリッチ「いや、それでいいんですけども、もう一つの属国があると思う。それが、地方自治体の首長が、もう国に対して任せっ放し」

水島「はい」

エルドリッチ「仮に日本がアメリカに任せっ放しで属国的な存在であれば議論は出来るんですけども、1700の自治体の首長が物凄く国に頼っている。私は全ての都道府県を周りまして、地方創生の方に、かなり力を入れているつもりですけども、そこで、どの町が成功しているのか、どの所が疲弊しているのか色々見て来たんですけども、一番大きな理由の一つが、教養の問題と思う。その首長の教養の問題。

これが学問ではなく、その人が自ら勉強して情報収集して、他の所へ行行って、場合によっては海外に行って、日本との比較ができる。特にこれからの時代は、自分の所との比較が出来る人か、そうじゃない人かによって決まると思う。私は、そういう教養のところが非常に大事だと思っています」

水島「うん」

エルドリッチ「あと、以前に文部科学大臣を務めていた下村さん」

水島「はい、下村博文さん」

エルドリッチ「あの博文さんが数年前に『啓育』という概念を発表していた。つまり教育ではなく啓育。自ら答えを探す。この日本は『教育』を使っている。要するに教え込む。だけれども、自発的に勉強しようとしていない状態をつくってしまっている。だから彼が教育ではなく『啓育』に切り替えるべきだと。これが言ってみれば、教養の話にも繋がると思う。自ら質問して答えを探していく、そのような教育、まあ、教育、啓育が必要。子供達だけではなく大人でも、やっぱり必要だと思っている。

さっき孤立してしまっているというお話があったんですけども、私はこの数年間で色んな経

営者が書いた本を読んでいるんですけども、みんな、殆ど同じことを言っているのが、まあ、アメリカにしても日本にしても他の所にしても、学校が競争を強調し過ぎて、協力、或いは協調の機会を与えていない。

つまり授業で誰が一番、点数を取るのか、クラスの中で誰が一番、トップになっているのか。そういう状態である限りは、協力精神が中々育たない。それが特にアメリカが重視していた競争意識だ。日本は、むしろ協調主義だったと思う。だから、日本がそういう協調精神を授業とか学校に取り戻すことが、やっぱり急務かなあと思う。

もし、これから経営者を育てるんだったら、彼らは、やっぱり協力関係を大事にしているの、だから日本の教育には色んな課題があるんですけども、潜在的な可能性もいっぱいあるんじゃないかなと思っています」

水島「これは前にチャンネル桜の番組で紹介したことがあるんですけど『教育勅語』ですよ
ね」

エルドリッチ「そう」

水島「教育勅語、或いは小学校1年生の教科書とか見ると、やっぱり、今、おっしゃった、きょうだい、親、友人、地域、みんな、大事にしようって、こればかり出るんですよ。実際、教育勅語もそうですよ。さっきの愛国心も、いざとなったら、みんなで立ち上がりましょうっていうねえ、これが悪と。戦後の教育がそういう悪としてきたものを、私は別に昔の言葉じゃなくてもいいから現代語でもいいから、まず極当たり前のものとして教育勅語みたいなのを復活してね、基本はこれだと。野党も、これには文句つけられないと思うんですよ。

軍国主義をつくったとか言っているけどね、そういうようなことを、もう一回、骨になる柱をきちっとやれば、子供達は解ると思うんですけどね。今、おっしゃった日本の希望というのが、競争したら間違いなく落ちこぼれが出るし敗者も出るから、そうすると、もう、希望を持たなくなるといふか、本当にみみっちい希望ばかりを持つようになる。

目先の明日は何を食いたいとかね、小金を貯めたいとか、こういうものしか無くなっちゃうというねえ。それで、さっき何方かが言っていたけど、いや、何とかなるわっていうね、江戸時代の良さっていうのは、本当に職人が何にもしなくても失業者ばかりだったって、でも何かやると必ず生きてはいけたって言われるようなね。それから家も大火事が必ず起こるから、直ぐに二日で建て直せるようなペランペランの長屋しか建てなかったとか、こういうことを考えた時、やっぱり、まあ、前の討論でも出たんですけど、明治維新から近代化っていうのを、我々は、もう一回、見直さなきゃいけないと。

明治維新は素晴らしかったっていうだけじゃ済まないっていうことも含めて、教育の問題は本当に大事だと思うんですけど、これ、どうですか石田さんは教育っていうのか、子供達の為に一番、大事なことはどういうものが与えられ、且つ又、学ぶべきものかっているかあると思うんだけど」

石田「そうですね。うちは子供が中学生ですよ」

水島「うん」

石田「子供に対しての教育っていうのを僕も色々考えて動いている訳ですけど、やっぱり、今、エルドリッチ先生とか水島社長がおっしゃった学校の中での競争。その競争で、その中から一番をとるんだって言って、じゃあ、何によって計られているかって言ったら偏差値じゃないですか」

水島「うん」

石田「僕は、偏差値よりも経験値を重視すべきだと思っているんですね。特にこれからの時代は」

水島「うん」

石田「今日もお話に出て来たビジネスを起こすとか起業するとか、こういったのは日本人は凄い能力を持っている人がいっぱい居るんだけど、一步、抜けだして起業する事って、中々出来ないじゃないですか。何故、出来ないかって言うと、やっぱり僕の周りから聞いている話だと、出来ない理由を言うんですよ。出来ない理由」

水島「うん」

石田「それを出来ない理由を言うんじゃなくて、やれるやり方を探せるような教育ね、だから、例えば僕ぐらいの世代になると、もう将来、歳をとったら飲み屋でもやりたいんだよねえとか言う人が結構、居るじゃないですか。やったらいいじゃん、って言うんだけど、まずは、そんなにお金が無いかね」

水島「うん」

石田「お金が無いなら何処かから調達するとか誰かから借りるとか、いついつまで貯めるとかね」

水島「うん」

石田「それで3千万、必要だって言って、3千万じゃなくて、ひょっとしたら1千万円でも出来るかもしれないっていうね」

水島「ああ」

石田「また別のやり方が無数にある訳ですよ」

水島「そうだね」

石田「でも、そっちの方に行かずに、その場で出来ないやり方を言っちゃって、そこで、もう終わっちゃうんですね」

水島「うん」

石田「それが多分、日本の教育の集大成だと思う」

水島「ああ、よく解るね」

石田「うん。もう、そこから先に進まない思考停止。もう政治家を見ていると、みんな、思考停止だしね」

水島「そうだね」

石田「例えば、北方領土を返して貰うんだったら、北方領土を返して貰う為のアイデアを、とことん考えりゃいいんだけど…」

水島「そうなんだよ」

石田「考えないですよ。じゃあ、それは何が大切かって言ったら、僕は、もう正に選択肢が多ければ多い程、出来るやり方というのはどんどん考え抜くと思うんですね。じゃあ、選択肢が多く持てるやり方っていうのは、要は経験値しかないと思うんですけど、これ、例えば、昔、地上波のテレビで年金問題について特集をやっていたんですよ。将来、大変だあみたいなこと

をテレビ局が言っている訳。それで歌舞伎町でコンビニでバイトしている男の子にインタビューしているんですよ」

水島「うん」

石田「将来、不安じゃないですかあって言って。そうしたら不安に決まっているじゃないですか。そんなのを何かもう延々と流している多分、フジテレビか何処かだと思うんですけど、こんな番組やっていてね」

水島「うん」

石田「で、そのう、若い男の子っていうのは歌舞伎町のコンビニでレジを打ってバイトして、終わったら近くの住んでいるアパートに行って、部屋の中でゲームをやって。ゲームをやって疲れた頃に寝るんですよ」

水島「うん」

石田「寝て起きたら、今度、またコンビニに行くんですよ」

水島「うん」

石田「要は、歌舞伎町の半径20メートルの中で生活をしていて、基本的にそこから外に出ない人です。僕はそれを見て思ったのは、このコンビニでレジを打って将来、不安で、やる事が無くてゲームしかやっていないっていう子が、もっと居るんであれば…」

水島「居るだろうねえ」

石田「海外に行けとまでは言わないけど、例えば、じゃあ、沖縄に行ってみると。北海道に行ってみると。東京の歌舞伎町と全く違う環境の所に行くと、そこに何らかのヒントがある訳じゃないですか」

水島「うん」

石田「僕は昔、家族と一緒に沖縄に行った時に、家族みんなで行くからジジババも連れて行くから、お金がかかるからって言うので、ホテルじゃなくて古民家を借りたんですよ」

水島「うん。うんうん」

石田「それで古民家を借りたらね、そこがボロボロの古民家。みんなで布団敷いて寝る訳ですけど、それはそれで修学旅行みたいで楽しかったの。その時の晩御飯がね、その古民家のおかみさんが沖縄料理をふるまってくれるの。そこで出て来た島ラッキョウがめっちゃくちゃ美味しくて、これ、旨いっすねえとか言ったら、こんなの裏の畑で捨てる程、採れるって言うんですよ。じゃあ、帰りに空港で買って帰ろうと思って、空港で見たら、島ラッキョウが、こんなちっちゃいパックで800円とか1000円とかするのね」

水島「うん」

石田「いや、だから、それを考えたら歌舞伎町の男の子は、例えば沖縄に行って、もう、このぐらいの2~3メートル平米の土地を借りて、そこで捨てる程、採れる島ラッキョウを作って楽天市場とかで売ればいいんですよ。例えばね。だから、そういう選択肢が増える訳じゃないですか。沖縄に行って、歌舞伎町とは全く違う環境に出くわすと。そういうことが日本のみならず世界各国を見たら、そんなので溢れている訳ですよ」

水島「う〜ん、そうだよね」

石田「そういう世界を見れば見る程、選択肢の数は、ばあ〜っと増えるから、結局、やれない

理由を言うよりも、やれるやり方を探す方に振り向いていく訳ですね」

水島「そうだね」

石田「そういう方に振り向く教育、選択肢を増やす教育。経験値を増やしていく教育。それはひいては、吉田松陰が言っていた行動できる学問っていうところに繋がると思うんですよ。だから正にエルドリッチ先生が言っているのは行動できる学問をね、例えば、農業なり愛国心なり何か起業家教育なり、多分、そういうところを通じて教育していきたいんじゃないかなって、さっき話を聞いて思ったんですけど、身近なところで言うと、僕は、大好きなYouTubeチャンネルがあって、ディスカバリー・チャンネルの『エドのサバイバル』というのがあるんですよ」

水島「ほお」

石田「イギリス人の軍人のエドさんっていうのが、もう、とにかく人間が生きていけないような所に行って、もう何か一か月とかサバイバルするんですよ」

水島「なるほど」

石田「カメラ一個で、裸で。洋服も無いの」

水島「ほお」

石田「何にも無い。道具も何も無い。そこで自分で道具を作って食べ物を探して、調理してってやるんだけど、モンゴルの真冬の極寒の地に行くと、もう大変じゃないですか」

水島「ああ、それは大変だよ」

石田「まず暖をとるところからやらなきゃならなくて、火を焚くだけの洞窟を探すだね。そこでは生きるヒントや知恵が物凄く詰まっていて、もう本当に覷だと、僕は徹夜で、それを見ちゃうぐらい大好きですけど、そういうことですよ。行動できる学問に加えて、人間として生きていく本能とか、例えば食糧危機が起きたってなった時に山に入れば食べ物がいっぱいあるし、日本は島国だから何処でも魚は釣れるしね、でも誰も魚の釣り方が判らないし、さばき方が判らないし、山に入ったら食べられるキノコなのか毒キノコなのか見分けがつかないじゃないですか。

だから、そういうのを知っているだけでも、自分の人生の選択肢とか生きる術っていうのは増えていく訳で、本当に地に足ついた教育って、そういうところだと思うんですよ」

水島「そうだねえ」

石田「是非、それをね、さっき食糧とか農業とかの話もされていましたがけれども、エルドリッチ・スクールで多分、そういうのも、きっとね」

水島「ね。うん」

石田「これは食べられるキノコだぞ、これは毒キノコだあ、みたいなね。そんなのいいと思うんですよ。必要だと思いますし」

水島「ああ、本当に、そういう意味でね、発想を変えればね、苦しい世界が面白い世界になるっていうね」

石田「うん」

水島「うん。そういう教育をしてあげれば、ここは失敗したけど、今度は次、これをやるとかね」

石田「そうですよ」

水島「色んなことを考えられるからねえ」

石田「そもそも失敗しないとねえ、何があれだか分からないんですよ」

水島「そうだよ」

石田「一歩、動かないと何が判らないかが、そもそも解らないっすよ」

水島「そうなんだ」

石田「うん」

水島「亡くなった西部邁先生とね、前に酒を飲んでいて、水島さん、店をやらないかっていうからね、ああ、面白いですねって言ったら、ああ、いや、これ、本当のことですよ」

石田「うん」

水島「それで、じゃあ、やりましょうかって言ったら、俺さあ、店主やってさあ、昼間はスタジオで撮影を、そこでやってね、夜は、俺が店主やって小さい講演会とかコンサートとかをやると。先生、飲みまくって何もやらないんじゃないでしょうねと言ったら、いやいや、俺はちゃんと真面目にやるよって言うからね、じゃあ、やりましょうって言って、本当に真面目に渋谷の警察署の裏側の地下を借りてやろうとしたんです」

石田「うん」

水島「ところが先生の体調が悪くなったのとチャンネル桜と聞いたら、その店が突然、断って来ましてね。最高の場所だったんだけどね。ただね、あの発想は、真面目に飲んでいてもね、いや、やろうと思えば、今、言ったように本当に何か出来るんですよ」

石田「うん」

水島「それと、つまみは私の好きな静岡おでんを2〜3品だけ用意して、つまみはそれだけと。じゃあ、スタジオもやるから、スタジオ代わりに使って、夜は飲み屋をやってというね、結構、色んな人が集まって貰ってとかね、でも西部さんも体調、崩しちゃったからね…」

石田「実は、昔、そういう店をやっていたんですよ」

水島「ああ、そうなの」

深田「ああ、やっていましたよねえ、あれ、凄かった、あのう…」

石田「そう。昔、ここは一応、17〜8年の付き合いですけど、だから、あれ…」

深田「狂っていますよ。六本木の交差点の家賃300万円の所でやって（笑）」

石田「家賃300万で、スタジオ付きのカフェバーやっていて。夜は、みんなだね」

深田「ねえ、集まって」

石田「集まって酒飲んで、その時の仲間ですよ」

深田「うん」

水島「ああ、そうなのか」

石田「そう。しかも六本木交差点だから」

水島「そうだね、やろうと思えば出来るね」

石田「やったけど、でもねえ、物凄い借金を背負って大変になっちゃって」

深田「リーマンショックでねえ～苦労したよね」

石田「リーマンショックの前ぐらいから始めて…」

水島「ああ、あの時にぶつかったんだ。そうかあ」

石田「それで大変な思いをして、でも痩せ我慢。みんなが集まってくれるから楽しくて、楽しくて」

水島「うん、そうだね」

石田「痩せ我慢しながら続けていたんですけど、でも、何とかかなりましたけどね、それでも」

水島「だから失敗してもいいじゃないかっていうね」

石田「いや、そうですよ。失敗しても命を取られる訳じゃないから」

水島「そう。だから西部さんと私が話したのもそういうことですよ。素人がやるかも分からないけど、もしかしたら面白い空間とか時間を生み出せるかも分かんないというかね」

石田「うん」

水島「そういう発想で、失敗したら、もう一回、やりなおしゃいいっていうねえ」

石田「うん」

水島「大したことじゃないからね」

石田「うん。でもね、その失敗って数年後に蓋を開けて見たら、実はその時の経験があったから今、これだけの財産があるとか、これだけの経験があるとかね」

水島「うん、出て来るよね」

石田「そういうことが殆どで、僕はその時の経験のお陰で、今、日本国内の色々な金融機関とのパイプを持っているんですよ。金融機関にスポンサーで入って貰った」

水島「良かったね」

石田「お店だったんでね」

水島「うん」

石田「うん」

水島「そうか、そういうことがありますからね、皆さん（笑）。大体、失敗するっていうのが多いと思うけど、いいじゃないかと」

石田「そうそう、そう」

水島「ね」

石田「うん、それが数年後の糧となるんですよ」

水島「そう。さっき言ったようにプラスになる事も沢山、あるしね」

石田「うん」

水島「人と知り合えたり色んなことを学んだりとかねえ、ああ、商売ってこういうものなんだとかね」

石田「う〜ん」

水島「まあ、そういう意味では色んな梁山泊みたいな形でね、だから人脈も随分、広がったと思うんですけどね」

石田「うん」

水島「だから、さっきの忍者があるんですよ」

石田「はい、忍者はそうですね（笑）」

水島「というようなことですけど、どうですか、この我々の希望として、そういう教育っていうのを色んな形で、失敗してもいいから何でもやってやろうという感じの人が増えたら、日本人は結構、生き生きしてくると思うんですけどね。大丈夫だぜっていうね。深田さんはどうですか、ご自身でも色々事業やっているから」

深田「ああ、私、一回、会社を潰しているんですよ。借金も数千万円ぐらい背負って、自分も無一文になっちゃって、あの時、銀行口座に40円ぐらいしか無かったんです」

水島「うん」

深田「銀行口座に40円しかない、どうしようと思って、冷静になって考えようと思って考えて、カードを切ってマッサージに行って」

一同「（苦笑）」

深田「1万円ぐらい払ってマッサージを受けながら考えてね。その時、ああ、そうだ、このクレジットカードをマックスまで切って、ビジネスをもう一度、起こそうと思ってね」

水島「うん」

深田「取り敢えず、手持ちのブランド物を全部売却して、100万、200万作って、会社登記して、もう一回、クレジットカードで輸入して機材を買って自分で組み立てて、それを売りに行くんですよ」

水島「なるほど（笑）」

深田「それを毎月、クレジットカードを300万円までマックスで切って、高速で売りに行っ
て高速でお金を返して（笑）」

水島「なるほど」

深田「この自転車操業を1年、2年、やったらね、なんと会社が大きくなって、そして、クレジットのカードの限度額が倍になったというね、成長したんです、私」

石田「えっ、成長したって（笑）」

深田「そうそう、そうそう（笑）」

石田「成長したのかしら」

深田「そうそう、そう。だから会社が倒産して数千万ぐらい借金を背負っても成長できるか

ら、全然、いけるんですよ」

水島「いやあ、そういう心持ちね。そういう気持ちとか、そういう人間で無いとね（笑）、うわあ～ってなっちゃう人も居るだろうけど…」

深田「いや、え、大丈夫ですよ。皆さん、クレジットカードを作って限度額、マックスに上げて持つといして下さい」

水島「（笑）」

深田「倒産した時に、これをマックスまで使えばいいんだっていうことをね、私は学んでいたんですよ。トレーダーの先輩がトレードで失敗して億単位のお金をすっちゃった人が居て、その時に彼はマックスでクレジットカードを使って300万円、キャッシングして、それでトレードして、お金を取り戻したっていう、そういう学びがあるので、皆さん、クレジットカードでビジネスが出来ますから安心して下さい（笑）」

水島「（笑）」

深田「教育問題で、一番、深刻なのは子供達じゃなくて大人の頭が悪いっていうね、ここだと思うんですよ。大人の頭が悪い中で、特に政治家の頭が悪いんです」

水島「うん」

深田「やっぱり政治家の発言を聞いていたらヤバイじゃないですか、菅さんがガソリン車を禁止して、2035年からガソリン車ゼロとか、貴方は日本経済をぶっ壊すつもりなんですかと」

水島「うん」

深田「頭がおかしいのか狂っているのか敵国のスパイなのかどっちなんだとかね、あとNTTはGAFAMを目指して下さいって言い出して、ビジネス・レイヤーが全然、違うのにNTTと比較するのはAT&Tとかインフラ側なのに、何故、GAFAMと並べて比較しちゃうのっていうのは、ちょっと頭がどうかしているんじゃないのかな、この人、みたいなことを平気で言う訳じゃないですか。

そういうことを考えると、小泉進次郎みたいなのが出て来たりね、日本の政界、とんでもないじゃないですか。日本の全体の偏差値を見たら、もうちょっと上なのに（笑）、何か、あそこだけ偏差値が凄く下がっているって（笑）、この現象は拙いと思っていて、私はね、政治家を養成する大学院を創るべきだと思うんです」

水島「うん」

石田「その前に、政治家達の為の大原簿記学校を、まずは用意した方がいいと思う」

深田「（笑）」

石田「大学の前に」

水島「そうだね」

石田「まず簿記、財務諸表ぐらいは知っておいて、そんなプライマリー・バランスなんて、あんな、呪われたような言葉は、もう使って欲しくないっていうかね」

水島「うん」

深田「うん」

石田「ちゃんと貸借対照表と損益計算書と、その複式簿記ぐらいはねえ、もうほんと国会議員の皆さんも勉強して下さい、みたいなね」

深田「会計事務所出身だもんね」

石田「ああ、そうそう、そうそう。国会議員は、税金と会計の知識は、やっぱり最低限、必要じゃない」

深田「まあ、そうですねえ。でも、私は、やっぱり、この国をどう変えるかって、いい方向に変えるには、どうしたらいいのかっていうことを凄く真剣に考えていて、まずは、自分でもね、政策の話が出来るチャンネルを育てるっていうのと、１００万人チャンネルになったらシンクタンクを創ろうと思って、シンクタンクで、そういう、いい発信とか、いい記事が書ける、いい分析が出来る先生達が確実に喰いっぱぐれないっていう仕組みをつくらうと思っていて…」

石田「ちょっと、そのシンクタンクの仲間達に入れてよ」

深田「ああ、勿論、勿論」

石田「うん」

深田「その先に大学院だなんて思っているんです。だって、アメリカだとジョージタウン大学とかね、ちゃんと、それが良い方向に向かっているかどうかは別にして、ちゃんと、ここで学んだら政治家になれるよっていう、そういう政治を志す人の大学院がある訳ですよ。だからアメリカって秘書のレベルが、こういうことを言ったら失礼なんですけど（苦笑）、日本の政治家の秘書さんと、ちょっとレベルが違って、アメリカでは秘書がちゃんと政策の話が出来るんです。日本の政治家の秘書ってスケジューラーみたいなものですよ。スケジューリングばかりして。でもアメリカの政治家の秘書でスケジューリングしか出来ない人は、それだけの仕事な訳ですよ」

石田「そんなのグーグル・カレンダーでいいじゃない」

深田「そう（笑）。なので、ちゃんと政策議論が出来る、陳情を聞いて理解する能力があって、それを上にあげられる能力のある人がもっと居ないといけないと思うんです。でも、その為のちゃんとした教育の場が無い。だから日本の政治って、何か、こうね、泥臭くって合理的に物事が前に進まない。議論も出来ない。議論するレベルにも至ってない、っていう、こういう悪循環の根源じゃないかなって思っているんですよ」

水島「私は、その通りだと思うんですよね。ただ、さっき言った、政治家を教育する大学院は、ある方がいいと思うけど、一体、その教授は誰になるんだって考えるとね」

深田「そうそう。私が選ぶんです」

水島「ああ、それなら、いいや、それ。それならいいね（笑）」

深田「私が今、新しいＩＴのサービスを作っていて、絶対に政府に検閲されないメッセージ・サービスを作っていて（笑）、課金でやるんですけど、これで、お金をチャリン、チャリン稼いで、それで大学院を創れないかなあと思って、今、勉強しているんです」

水島「いや、本当に正直な話、今、日本の中に政治的な経済とか、そういうものの本当にエリートが政治家の中に殆ど居ないっていうね」

深田「はい」

水島「これから日本を担ってくれる政治家が自民党に居るか、じゃあ、社民党に居るか、立憲

に居るかって言うと、殆ど居ないんですよ。ゼロと思った方がいいと思う。それで、私が今、考えているのは草の根の所から突然、現れるような、今言ったそういうものを、地道に遠回りかもしれないけれど、きちんとしたベースから教育して、やっぱり学んでいく青年達が担うしか、今の連中を変えようなんて、まあ、それは無理でしょう」

深田「無理です」

水島「ね。そういうことだ。だから、そういう意味ではねえ（失笑）、今言った一番大事なことは、まず、我々は現状の政治家は一人として、みみっちい希望を持たないってこと。こいつらは全部、駄目っていうのを、私は今、決意したんですよ。こういう風に誰もオッケーしないって、こいつら、みんな駄目だっていうのをね、正直言うと、知り合いが凄く多いから辛いけど」

深田「う〜ん」

水島「実は自民党の安倍系とかね、ああいう人達は本当に親しくしていた人も多いから。でも駄目だっていうのを一回、認めてから、もう一回、本当に遠回りに見えるかも分かんないけどね、30年後でも40年後でもいいから、我々の国できちっとした青年や子供達を育てる教育をしていかないという気がしますけど、でも、皆さんみたいな方が居ると本当に希望があるんですけどね（笑）」

深田「うん、だから…あつ、どうぞ」

エルドリッチ「はい」

水島「どうぞ」

エルドリッチ「今の関連で、やっぱり特に日本の場合で言えると思うんですけども、この各政党の党の拘束が強いので…」

深田「そうそう、そう」

エルドリッチ「だから仮に賢い人が居ても、その党が方針を決めて決まっている以上は、逆らえない状態です。だから、勇気を持って言える政治家が必要です」

深田「いや、そうじゃないんですよ。そうじゃないんですよ。これもシステムの問題で、あ、ごめんなさい、先生」

エルドリッチ「はい」

深田「おっしゃる通りで、その党の規則に言いなりにならなきゃいけないんですよ。じゃあ、どうして、みんなは党にしがみついて無所属でやらないのかって言うと、この無所属差別が凄いです。無所属だと選挙の時にポスターが貼れないとか、無所属の人は本会議で意見が言えないとか、物凄い色んな無所属差別があります。これを打破するソリューションを、私は考えたんですよ。無所属の党っていう党を創って、与野党の無所属差別を形骸化するっていうね。これ、無所属を今迄、徹底的に虐めて選挙でもフリー、政党交付金も無い、本会議でも発言権が無いって、こののを、党のアジェンダが何も無い無所属の党みたいな党を創って、そこに所属することによって、無所属差別っていうのが事実上、出来なくなるという仕組みを作って、無所属虐めに対抗すれば、その党議拘束とか党の規則に絡み取られたくないっていう時に政治家達が避難所みたいな形で移籍して来て、そういう政党を創って運営すると、党議拘束が段々崩れて来ると思うんですね」

水島「うん。これねえ、前もちょっと言ったけど、私は日本連合って創ってね」

深田「はい」

水島「例えば参政党でも何でも保守党でもね、どんな党でも一つの例えば減税するとかね、積極財政にするところだけ、或いは、無原則な移民に反対するという、その一点だけで集まって連合を創って党にしちゃう。党ってというか政治団体にしちゃう。その代わり、全部、政党は残すと。あと他のことは全部、自分で自由にやればいい。ただ、そうなると比例区で、その何とか連合というところに入れてくれると、ベースが凄く上がるんですよ」

深田「う〜ん」

水島「そうすると政党の要件を残したまま、或いは、無所属の人もね、自分がちゃんと票が取ればアップする。だって自民党は、全国区だと15万ぐらい取れば当選しちゃう訳でね」

深田「う〜ん」

水島「だから、そういうものを取っ払わないと、いくら180万票取ったって、永久に1議席というようになっちゃう。つまり現状の今の戦後体制そのままを残すようにしているだけでね、もう偽善欺瞞の民主主義だと、私は思っているの、今、言ったような形でやって行かないと、それを無所属の会でも何とか日本連合でもいいからね、そういう風に各政党を残して集まるような形にしていけないと、自民党や、こういった戦後体制の風穴を開けられないっていうね、敗戦利得者達がいつまでも幅を利かすような状況になっていくと思いますね」

深田「いや、本当におっしゃる通りだと思います。だから、もう与党に所属しようが野党に所属しようが、もう日本の大企業と同じで、上には絶対に逆らえないようになっている訳です」

水島「うん」

深田「しかもゲームのルールが、無所属に徹底的に不利に出来ているのでね」

水島「そうですよ」

深田「そうすると起業する事も出来ない、党から離れることも出来ない。そうすると、もう色んな名前の党はあるけれども、実はみんなで同じことをやるしかないっていう状況、今の状態を打破しようと思うと、この無所属格差、無所属差別を徹底的に打破する、破壊していけないといけないっていうステージまで、もう来ちゃったなって思います」

水島「だから、そここのところのね、我々が今、本当に目の当たりにしているのは、トランプが今迄、当たり前だと思っていたことを全部、ぶち壊していくっていうねえ、物凄い奴ですよ。私はドゥーギンというロシアの評論家を高く評価しているけれども、恐らくロシアとアメリカ、要は基本的に残る。あとは付随した国になってくっついていうような流れがあるだろうと。」

もうヨーロッパはこのまま行ったら滅びるというか、ただ One of Them になってしまう。日本も勿論、そうですけどね。ただ我々はアメリカにくつつくと言っても、トランプの方式でやっていないし、G7の流れでやるって、実は、今日も来る前に、私は、官房長官のコメントを見たら、どうするんだと。トランプが何とロシアを入れようって言っているんですよ。G8にしようという風に言っているのにも、林さんはG7の自由と民主主義を守る、こういった理念を大事にしながら、でも各国と相談しながら対応していきたいって、こういう答になっている訳です」

石田「いや、もうネジが外れていますよねえ」

水島「(頷く) だから、本当のことが、ちょっと頭が悪いって言うか、分かっているけど対応できない状態になっている。これは本当に一番、危険なことだね。現実にはトランプはどんどんやっていますからねえ」

石田「うん」

水島「それと我々の国は何故、Great Againにならなかったと。インドが言われている。トランプと一緒に言って言っている。ヨーロッパも一応、マスクが言っている。ロシアは勿論、そうですよ。というようなことになると、この希望というもののの中に、本当に政治を変えるしか中々日本の希望はないし、その為には、また教育っていうね。

だから、本当に、さっき言ったような主軸っていうのが、もっとあって良かったと思いますよ。1968年、私が大学に入った時は、右翼大学ってあったんですよ」

深田「えっ？（笑）」

水島「右翼大学」

深田「そうなんですか（笑）」

水島「国士舘大学」

深田「ええ、ああ、ああ、なるほど」

水島「大東文化大学、亜細亜大学、拓殖大学ってね」

深田「はい」

水島「これは、もうゴリゴリ右翼って（笑）というようなイメージのところ、で、けど、今、全部、左翼大学になっちゃっている。つまり教授がね、みんな、東大から出た、あのGHQで焚書2700冊を選んだ連中の系統の人間が全部、公立大学だけじゃなくて私立まで、みんな、そうなっているから、これを本当に変えなきゃいけないですよ。そうすると、本当に、エルドリッチさんみたいな人って言うか、日本人の中からも出て来て、日本の教育を一個一個、変えていかないと、本当に今、問題なのは、もうトランプが始めたこととか、さっきのアニメの話じゃないですけど、どうですか。今迄のグローバリズム、リベラリズム、共産主義とか、こういったものは、もう通用しない。つまりイデオロギーで教育はやらない。本来、自分達は何だというようなところを、もう一回、取り直さないと」

深田「いや、私、出来ると思っているんですよ」

水島「うん、うん」

深田「松下政経塾って、出来上がったのが1978年ぐらいじゃないですか。それで日本の政治が悪化したのは、その卒業生達が本当に政治家になっちゃったからですよ（苦笑）。だから、今から、やっぱり自分もシンクタンクを始めなきゃって思っているのは、逆に、そういう松下政経塾の様な悪の成功モデルがあるのであれば…」

水島「（笑）」

深田「本当にいい教育をしたら、この国の為になるようなことが出来る人がどんどん出て行くんじゃないのって、私は思っているんです。なので、やっぱり、その為には、まず金を稼がないといけないと。やっぱり松下政経塾の強みっていうのは、本業でお金を稼いでいて勉強をする人に、ちゃんと給料も出る訳ですよ。だから、やっぱり、そうやって、安心して勉強が出来る時間と、あとは、その教育がちゃんと与えられている所を、いかにつくるのかっていうのが、これから自分の人生のアジェンダになって来ると思っているんですよ」

水島「う～ん。だから松下政経塾の失敗と言うかね、まあ、成功したと言う人も居るかも知れないけど、はっきり言うと碌な奴が出ていないっていうね、実は、保守系の人達、私は知り合いが沢山、居るんです」

深田「はい」

水島「居るから、そういうことを言いたくないけども、だからと言って、政治家になった人達が今、本当に戦後の日本の為になっているか。まだまだ足りない。いや、根性が足りない、勇気が足りない」

深田「うん」

水島「ね。状況に流されているっていうね、本当は、松下幸之助さんも望んだのは、もうちょっと幅の広い豊かな考え方が出来て、そして勇気を持って前へ踏み出せる、そういう事だったんじゃないかっていう、理念を見ると、私はそう思っているんだけど」

深田「松下幸之助さんは死の床で、自分の人生の最大の失敗は松下政経塾だったって言ったらしいですよ」

水島「ああ、言ったらしいの？ああ、そうなの。いや、その通りだと思うね」

深田「でも自覚があるだけ良かったと思いますね」

水島「うん。ただね、やっぱり、ああいう経済人でもね、何とか日本の為になることをね、そういう場所を、つくりたいといった、そういう志っていうのは、やっぱり、ねえ、まあ、失敗に終わったとしても、そういうことは大事だと思いますよ。本当の意味で、日本のシンクタンクとか大学とか、我々の国には戦争学を教える所が無いんですよ」

深田「ああ、ああ」

水島「防衛大学以外は」

深田「ああ、確かに」

水島「安全保障を考えたら、普通の所にはあるはずですよ」

深田「そうですねえ」

水島「命に関わるね、命運に関わる問題でしょう」

深田「う～ん」

水島「エルドリッチさんとか直ぐに呼びたいよねえ」

深田「そうですね。呼びたいですねえ」

水島「そういう意味ではねえ」

深田「はい」

水島「そういう大学の防衛学部の教授としてね。というようなことで、今言ったように、教育が大事だっていうのが本当に解って、ただ、今、聞いていると、石田さんにしろ、深田さんにしろ、こういう人達が希望になっているっていうね（笑）、現実には、そういうことです。そういう意味では、前田さんは、どうですか」

前田「はい。石田さんの話とかね、いつも聞くと、本当に何かやる気が出て好きですよ」

石田「ああ、ほんとですか」

前田「僕も、どっちかって言うと同じ考え方ですね」

石田「うん」

前田「だから深田さんとか石田さんの今日の話を聞くと、本当に、みんな、俺もやるかっていう人が凄く増えたと思うんですけど、ただ別に反論する訳じゃないんですけども、それと同時に、これを見ている多分、少なくない人は、この二人ぐらい頑張らないと、今の日本では幸せに生きられないのかっていうことで、多分、ちょっとガツクリきちゃった人も凄くいっぱい居ると思うんですよ。」

結局、起業するにしても海外に行くにしても、そこには、ある程度のやる気とかスキルとか色々なものが無いと中々出来ない部分があると思うんですよ。恐らく社会を構成している殆どの過半数の人は、そこまでのことは出来ない。地元から一生、出ないで、普通に近くの職場で働いて人生を終えるっていう人が殆どだと思うんですけども、僕は、そういう人達でも別に何にも困らずに幸せに生きていける社会をつくるっていうのが、やっぱり政治家の大事なポイントだと思うんですよ」

水島「うん、うん」

前田「だから経済成長だとか人の幸せを追求するに当たっては、深田さんとか石田さんみたいな人が自由に闘える仕組みを勿論、維持した上で、今、やっぱり足りないのは普通に真面目に働いているのに、どんどん給料が下がるっていうね、これを止めないことには、どうしようもないなっていうのが一番、思っていることですね」

水島「そうですね」

石田「ああ、ちょっといいですか」

前田「はい」

石田「それに対して、反論する訳じゃないんですけどね」

前田「同じじゃないですか（笑）」

一同「（笑）」

石田「あのう、僕も別に最初からこうだった訳じゃなかったし、やっぱり何か一冊の、とある本の出会いとか一つの映画との出会いとかがある訳ですよ。だから、本当に僕も普通に会社勤めして問題意識を持たずに普通に仕事していた人間ですけど、大学時代なんかも麻雀と競馬とパチンコばかりやっていたしね、もう碌でもない生活を送っていたんだけど、一冊の本に出会ったとか、僕の場合はトーマス・フリードマンの『フラット化する世界』という本があって…」

前田「ああ」

石田「これからは、とにかく強烈な個性を研ぎ澄ませないと貴方、生き残れないですよおということが書かれていて、僕はその本に書かれている１０年後、２０年後の未来を読んだ時に、ああ、じゃあ、本当に強烈な個性を研ぎ澄ませようっていう方向に僕は振り切っちゃったんですよ」

前田「うん…」

石田「例えば、僕は一冊の本に影響を受けたし、あとは、この間、前田さんに教えて貰った『型破りな教室』ですよ」

前田「はい」

石田「あの映画を観たら、俺なんかも、まだまだ甘いなとか思っちゃう訳ですよ」

前田「ああ、そうですか（笑）」

石田「ああいうね、2011年のメキシコで物凄く治安が悪い中で、学力もメキシコ国内最低ランクの小学校じゃないですか。あの中で、もう一生懸命、勉強して、航空、宇宙、乗組員、航空、宇宙航空士になろうとか哲学者になろうとか」

前田「はい」

石田「子供達が夢を持って動き出す。やっぱり何かのきっかけってある訳で、あの映画の場合は、あの例の先生だったんですけどね」

前田「そうですね」

石田「うん。だから、それで何か出会いが必ずある、みんな、きっかけがあるんです」

水島「うん」

石田「一冊の本なのか、メンターとの出会いなのか」

深田「う〜ん」

石田「映画との出会いなのか。色々あるんだけど、結局、半ば運だと思いますよね」

前田「それはありますね」

石田「うん」

水島「いや、だから…」

前田「だから、いっぱいアンテナを張っていて、それを色んなところからやるっていかないと…」

石田「そうアンテナを張らなきゃいけないと思う」

深田「映画の力って、凄いですね」

前田「そう、だからメンターに出会えるどうかって、本当に運ってというのは、その通りだと思いますね」

深田「いや、メンター、要らなくないですか」

前田「（笑）」

石田「だから何と出会うのかに よると 思う。物によってはメンター要らないし、『型破りな教室』はねえ、物凄くやる気をかき立てられるもんね」

前田「そうなんですよね」

石田「いや、殆どの人が日本人って全く生温いなって感じると思う」

前田「（笑）」

水島「うん、いや…」

石田「あんな過酷な環境の中でね」

前田「やはり、そういう人が増えて欲しいと思って、僕も、ああいうのを紹介するんですけどもね」

石田「ですよねぇ」

前田「う～ん」

水島「いや、それとね、もう一つは、政治化することが目覚めていることにならないっていうのはね、私は、いつも言うんですけどね。私は、そういう政治活動的なものをやっていますけども、一番、大事なのが、やっぱり前田さんの言っていたような人達がベースになること、その人達が、明日、休日だから行ってみようかなということが大事でね、急に目覚めて政治家になって、俺は日本を担うんだというようなことじゃなくて、実は、そういう人達が立ち上がらないと、やっぱり日本を変えられないし、家族は大事だとかね、そういうベースをちゃんと持っている人が一番、信頼できるから、ネクタイ締めて普通に真面目に生きている人達が駄目っていう訳じゃないっていうね」

前田「勿論、そうですよねえ」

水島「その痛みをね、多分、お二人は失敗体験も沢山持っているから、説得力があるのはね…」

石田「凄く失敗していますよ」

水島「だから失敗しても大丈夫だっていうね、そっちのところがね…」

前田「そこがねえ、やっぱり、ああ、大丈夫なんだと思って救われますよね」

石田「う～ん」

水島「いや、そうですよ。何とかなるもんだっていうね」

前田「そうですよ」

水島「私も非常に楽天的で、ちょっと自慢じゃないけど、私もスッテンテンになっていますから、はい」

前田「その最たるものって感じはしますから」

一同「(笑)」

水島「自慢じゃないけど、9億円、失っていますから」

前田「フラットのプラス思考というか…」

深田「9億円ですか、負けました」

石田「でも、僕は将来、こういう大人になりたいですよ」

水島「(笑)」

深田「ああ、そうですよね」

石田「モーガンさんが言ってたけど、ここは寺子屋って言っていましたよ」

水島「なるほどね」

石田「チャンネル桜の、この場所は寺子屋であって、水島社長が、我々のお父さんでね」

前田「まあ、本当に学ぶことは多いですよ」

石田「多い」

水島「でも、さっき言った寺子屋っていうのは、それぞれ自主的に必要な人達、学ぶ気がある人達が集まってということがあるのは、江戸時代がそうだったからねえ、やっぱり、今、国とかに頼っても中々出来ないっていうね」

石田「うん」

水島「だから、やっぱり深田さんが言ったような、自分で学校を創ったり、シンクタンクを創りたいとかいうのも、よく解るよね」

石田「うん」

水島「やるしかないんですよ。今は、やる奴がやるしかないっていうね」

深田「いや、もうね、私は待つのが嫌なんです。待っているのが嫌だ」

水島「(笑)」

深田「もう早く変えたい。無いなら自分でつくって変えてやるから待ってけよって思いますもん」

水島「そうだね」

前田「政治家とかガチガチですよ。結局、無党派差別と言っていますけど、本当にその通りで、維新の人に、よく話を聞くことがありますけど、維新という政党がちょっと変わっているのは、あそこで一番偉いのは、市町会議員の人達だって言うんですよ。

それは代表の人が言っていましたけど、何故、そういうことを言うのかと言うと、結局、国会議員なんていうのは一人じゃ受かれないと。国会議員が受かる為には、その下には、都道府県の県会議員とか何人かが支えなきゃ駄目だし、その人達が支えているのは、やっぱり市区町村の議員ですよ。この人達の支えがなければ票は掘り起こせない。だから、うちが一番、偉いのは下の区議会議員だということを言っているんですが、結局、無党派の差別で最たるものっていうのは、その一番下の部分の組織づくりのところですよ」

深田「う〜ん」

前田「この一人一人の区議会議員が各地で組織を作って、そこで一丸となって票を集めて金を集めていくんだけど、ただ、それをやる為には、強力な推進する政策なり旗印が必要で、この無党派のアイデアって素晴らしいんだけど、それぞれ好きなことを言っているよっていう、それが、どれぐらい強い求心力になるかっていうところが勝負ですよ」

深田「うん。でも、そこは、やっぱり色々な人に理解して貰うことだと思うんですよ。結局、何故、自分達が増税に苦しんでいるのって言うのと、与党も野党も増税政党。巨大な増税政党が二つある訳じゃないですか」

前田「うん、その通り」

深田「そういう人達が、それぞれの政党の中に増税反対ってやっている人達は居るんだけど、じゃあ、何故、その人達は減税やってくれないのってなると、やっぱり党議拘束に縛られているから。じゃあ、何故、無所属にならないの。無所属差別があるからってということで、ここを啓蒙する余地はあると思うんですよ」

前田「ほんとですよ。だから、それが本当に大きな問題で、自民党の中でも、ずっと、いいことを言っている、緊縮財政なんか駄目だ、プライマリー・バランス駄目だと言っている人が、ある程度、居るから、どうしても彼らを支えようっていうことで、比例になると自民党に入れると。だけれども、そうすると今の主流派は全く逆の方なので、全く違う人の為に入れた

票が悪用されているような状況ですから」

深田「うん。そうなんです」

水島「だって、それがガス抜きだから」

前田「そうですよ。ほんと、そう思います」

水島「みんな、駄目だって言わなきゃいけないっていうのはね、そのガス抜き用に、一見、保守らしいことを言う奴はね…」

前田「いや、居ると…」

水島「居るんですよ。みんな、知り合いだから、あまり言いたくないけど本当にね…」

一同「(苦笑)」

深田「西田昌司とか(笑)」

水島「そうそう、そう、そういう反増税とかね、だったら反増税で、或いは、もっと言えば夫婦別姓だってそうだしね、色んな事をやれば、本当はどんどん分かれればいいんですよ。でも、そういうことじゃないからね。やっぱり一番の問題は、戦後の体制、この８０年の体制を、どうやって本当にやるかって言ったら、深田さんが言っているようにね、誰かがやって行くしかない。政治家に、今、権力を持っている人達、権力のおこぼれにあずかっている連中に言っても、絶対に動かないです」

深田「絶対、動かないと思います」

水島「絶対、動かないです。もう私は１００％断言してもいいぐらい。だから、そういう意味での絶望は必要だけれども、それが判っただけでも凄い希望になるんですよ。もう、今の戦後の８０年は駄目だというようなことを自覚できないと、みみっちい希望にすがっちゃうんです。でも自民党の中には、あの人が居て、いいこと言っているじゃないか、なんてね」

前田「そうなんですよ」

深田「(笑)」

水島「ね」

前田「それで何十年、騙されて来たか」

深田「(笑)」

水島「じゃあ、何故、お前は移民法に賛成したんだ。アイヌ新法に賛成したんだってね」

前田「そうそう、そう」

水島「どんどん言える訳ですよ。お前は結局、賛成に手を上げているじゃないかと言ってね。少なくとも欠席してみると。風邪ひいたって言えば済むんだからね。というようなことがあって(笑)、この希望が中々難しいっていうのがあるけど(苦笑)」

一同「(苦笑)」

水島「でも、今日は元気になっていますね」

深田「う～ん、でも希望はありますよ」

水島「ね」

深田「だって私達に出来るのにやって来なかった。国民として、この国を変える、政治の仕組みを変えるべきなのに…」

水島「うん」

深田「やれることが、いっぱいあった訳ですよ」

水島「そうだよ」

深田「でも何もやっていなかった訳ですよ。でも、これからやれるんだから、１０年、２０年、３０年かけたら絶対に変わるんですよ」

水島「うん」

深田「そう思うと、今、めちゃくちゃ、いいなと思っているんです」

前田「松下政経塾もね、最近受かった人に、僕、直接、話をしたんですけど、結局、昔みたいに年間、何十人じゃなくて、せいぜい２～３人ぐらいしか出せないぐらいまで弱体化しているんですよ。だから、そう考えると、じゃあ、今から２０年後は彼らの影響っていうのは多分、減っていくはずですよ」

深田「萌絵塾」

前田「そうですね」

深田「はい（笑）」

前田「だから（笑）」

深田「（笑）」

掛谷「２０年と言わなくても、私は、この１年にチャンスがあると思っています」

深田「はい」

掛谷「だから、今、ＵＳＡＩＤで世界のメディアの人が金を貰っていた。今後、名前が出て来るかもしれませんね」

深田「う～ん」

水島「出て来ますね」

掛谷「多分、日本の政治家で貰っている人が結構、居ますよ」

水島「はい。もう玉木さんなんか出ていますよね」

掛谷「更に…」

水島「国民民主党の」

掛谷「更にＵＳＡＩＤは、実は、国の予算としては連邦の１％未満ですよ」

深田「うん」

掛谷「このあと凄いのが出て来ますよね」

水島「はい」

掛谷「HHS。だからケネディ」

深田「うん」

水島「大変どころのものじゃない」

掛谷「あそこは25%ぐらいですからね」

水島「製薬会社とかね」

掛谷「恐らくコロナ禍で、日本の政治家に、かなり撒いていますよね」

水島「そうです」

掛谷「それで、その貰った奴らの名前が全部出て来るように、だからイーロン・マスク、頼むと」

水島「ああ、そうです」

掛谷「そうしたら、今、日本の腐った政治家を一掃できるチャンスがあります。だから、この1年は何とかアメリカのその辺の人に言って、日本で貰った人の名前を公開させる」

深田「うん」

掛谷「これは本当に一掃するチャンスですよ」

水島「うん、だからねえ…」

石田「とどめを刺す」

掛谷「(笑)」

水島「だからねえ、彼がやってくれればいいけどね」

掛谷「はい」

水島「これ、ネタになるからね」

掛谷「はい」

水島「日本の言う事を聞かせる為には、お前ら、やっちゃうよ、出しちゃうよって言われたらね」

一同「(笑)」

水島「何でも出します。お金も出します。税金、出します」

掛谷「ええ」

水島「これ、やりますからね」

掛谷「はい」

水島「151兆円から200兆円になるかも分かんないというね。たまたま、今日、イーロン・マスクのXですけど、ロイターは、はっきり、アメリカ政府から大規模な社会的欺瞞の為に数百万ドルの支払いを受けていたっていうのね。もう、どんどんバラし始めている。BBC

も約2割近くUSAIDから受け取っていると。こういうのが、もう段々出始めていますね。

だから、もっと怖いのは、そっちの方、さっき言ったロバート・ケネディ・ジュニア。共和党の重鎮達が、みんな、反対したって言うけどね、よく解りますね。これがやれたら、本当は革命ですよ」

掛谷「はい」

水島「我々の国も本当は、こういうものをケネディ・ジュニアにお願いしたいね。これ、はっきりする訳だから。誤魔化していた連中が今、ちょろちょろ、ちょろちょろ出始めているでしょ」

掛谷「うん」

水島「国民民主の彼なんかも、ちょっと出始めているし、まあ、あまり具体的に言うと、また、あれになるけども出た時でいいけども、こういうのが出たら、本当にお前ら、どうするんだっていうことになると思いますよ。特にワクチンの関係の問題は、やはり大きいお金が動いているし、そういう意味で明らかになったのは、少なくともジャーナリスト6千人に大変な金が流れていたっていうねえ。自慢で言いますけど、うちは、びた一文、貰っていませんから」

一同「(笑)」

水島「もう、いくらでもドンと来いっていう気持ちですからね。でも保守系の人達も困る人が多いと思いますよ」

掛谷「そうですよね。だから、あれはデマだ、陰謀論だって言っている保守系の言論人が今、居ますよね。ああああ、ああ、そういうことかって解りましたね(笑)」

水島「それと新聞もみんな、かなり静かですから」

一同「うん」

水島「意外とチクチク、チクチクね、トランプの悪口を言っていますけども、もう相当、ビビっていますよ。というようなことで、もう時間も無くなりましたので、一言ずつ戴いて終えたいと思います。じゃあ、澤村さんから、お願いします」

澤村「そうですね。今、色んな話を聞いていて、やっぱり本当に時代の変わり目だなんっていうような感じがしました」

水島「はい」

澤村「実は、私も数年間、隠遁していたんですけど(苦笑)、ようやく色々本も出たので、表に出る様になりましたが、トランプとかヴァンスさんが大統領令を次々として、どんどん『常識の革命』をするんだって、ああいうのを見ると、本当にこれまでと違うものを感じるんですよ。

ただですねえ、エルドリッチ先生の翻訳された『派閥』(渡辺恒雄)、ああいうのなんかを読んで、私は、ちょっと半分ぐらい、そっちの世代です。かつて、色んな新党運動なんかが、どうなって行ったのかを見ているので、やっぱり人間は、特に日本の政治の中では派閥的なものっていうのが、本当に無くなるのかなっていうのが、半分ぐらいはそうなって欲しいかなと思いますが、半分ぐらいは無理なんじゃないのみたいな感じはしています。

だから、逆に幕末もそうですけど、どうなっていくか判らないから、面っていうのがね、色々出て来るっていうのが、この時代の変転期の特徴かなという風に個人的には思っているんで

す。色んなものが出て来ると思います。イーロン・マスクさんが何をやるかっていうのは結構、凄いと思うし、大体、トランプとかヴァンスって、そんなに政治的なキャリアが無いですよねえ。

それがあれだけの力を持って、それで次々と色んなことをやって行くっていうのは、やはり何か時代が変わって行く特徴だと思うんですよ。ただ単純じゃないと思うんですよ。日本の政治風土、それから色んな派閥を始め、今、派閥は無いですけども、それが出来てきた理由、継続した理由があるんでね、それをどう変えていって凄く強い力が必要だし、力だけじゃなくて色んなものが必要になって来ると思いますね。今、丁度、そのドラマが時代的に行われているので、その意味では凄く興味深いなと思っていますが、先程言ったトランプが出て来た経緯でも色んな評価が出来るんですが、やはり、その真面目に働いている人が投票したんですよ。

ポリコレみたいなお金持ちが何か理念的な事を言っても、自分達は全然、生活が良くならなかったじゃないかと。そんなに華やかな世界にどうのこうのじゃなくて、朝、起きて、会社に行って戻って来てっていう、そういう人達が、やはりトランプに投票している訳ですよ。

黒人とかプエルトリカンとか、そういった人。特に黒人なんて共和党に投票するはずがないみたいに思っていた節があるんですよ。ところがやっています。それは、やっぱりね、移民だって不法移民と合法移民が居ますから、合法移民からすると不法移民っていうのは冗談じゃねえよっていうのは思っていると思うんですよ。やっぱり、基本的には地道に真面目に働いている人達が大量なのでね。そういった人達は多分、トランプは捉えたと思うんです。その人達が持っている不満みたいなものですよ。

やっぱり政治っていうのは色んなテーマがあるんですけど、もう大文字中文字小文字があるんですけど、やはり日本が真面目に働いたのに、何故、こうなのかなという、その不平不満というのは的確に捉えて、そこを政治の文脈の中で、どう具体化していくか多分、それをやった人が勝つと、私は思うんですよ」

水島「はい」

澤村「絶対、そう思います。それから、もう一つ、ちょっとコメントしたいのは、結局、一種の根本的なこと、今日は、もしかしたら文化の話とかするのかなと思っていたんですけど、ここまで状況が、この時代的な変貌がある時になると、こんなことを言うと、えっと思われるかもしれないですが、人間って何って、ある程度、その人間観っていうのを考えながら政治も見ると、自分達の生活も見ると、色んな目の前で起きているものを見た方がいいのではないかなと思うんですけど、日本の場合は個、個人主義、これは近代の特徴なので個が大事だっていうのは当然、あるんですよ。

ただ、その中で、家に行けば家族の父だし、地元に行けば、こういう役割があるし、会社に行けばこうだっていう、その色んなものが階層的に重なって来て、一人の人間が出来て来ると。それが近代化によって色々分け隔てられたようなんですけど、それなんか人間の真っ当な理解みたいなものを、ちゃんと踏まえて、しかも真面目に働いている人をちゃんとフォローしていくっていう政治勢力が、今、混沌とした中ですけども、最終的には何らかの役割を果たして欲しいなと思っているのが私の希望です。以上です」

水島「はい。有難うございます。エルドリッチさん」

エルドリッチ「はい。有難うございます。今日、色んな角度から日本の希望について、色々お話があったんですけども、今日、あまり出ていなかったのが、ちょっと暗い話で、少子化問題とか人口減の問題ですけども、特に自民党政権がお金で解決しようとしている。それが限界もあり無理だと思う。むしろ悪循環を作っている。何故、人が結婚して、子供を産むかと言うと、皆さんも解っているように、やっぱり将来に対して夢があり希望がある。

なので、全ての国民が希望を持っている日本を一緒に作りたくなあという風に思っています。以上です」

水島「そうですね。それがないと結婚や子供をつくる気にならないですよ」

エルドリッチ「はい」

水島「はい。有難うございます。では、掛谷さん」

掛谷「そうですね。深田さんが政治家は、みんな、頭が悪いって話をされて、ただ日本には頭のいい人は居るんだけど、彼らは、その頭の良さを自分の為だけに使う。まあ、典型的なのは学者ですね。国民の為じゃなくて自分のことしか考えていない。結局、頭のいい政治家を作る為には頭が良くて、且つ、国を愛するっていう両方が、ANDの取れる人が多分、今、居ないから碌な政治家が居ないんだと思うんですけど、私の希望があるのは、今の学生を見ていると、やっぱり安倍さんの教育改革がちょっと影響していて、比較的に一世代前よりも愛国心を持っている人が増えているかな。

だから彼らの世代から、凄く優秀な国の為に働いてくれる人が出て来るんじゃないかなっていうことを期待しているのが希望ですね。最後に、トランプさんから学ぶということ、ひとこと言うと、トランプさんってやっぱり素晴らしいのは、意見が違っても色んなところで、ここは一致したら協力する。

それはロバート・F. ケネディ・ジュニアが典型で、環境問題には絶対、ケネディに触らせないと。だけど国民の健康の問題では素晴らしいから、その役職に就けるってね、日本人って、これが苦手なんです。とにかく何かで意見が違っていると、あいつは敵だ味方だってやっていますよね、この保守界限も」

エルドリッチ「(笑)」

水島「いや、多いですよ」

掛谷「それをやめて、トランプさんに見習って、ここでは意見が違いますが、ここでは意見が一致するから協力しようという、そのトランプ流に学ぶということは日本政治に必要で、それが出来れば日本の未来は明るいと、私は思っています」

石田「素晴らしい、ですね」

水島「そうですね」

掛谷「はい」

水島「でも一致できることはあるんですね」

石田「そうそう」

水島「反移民とか減税とかね。本当に色々沢山、ありますよ」

掛谷「うん」

水島「はい、有難うございます。では、石田さん」

石田「はい。今日、前半でコンテンツのお話が出て来ましたが、やっぱり、コンテンツ産業って凄く重要で人の心を揺さぶるものとか、その人の人間形成に大きく影響するものとか、いっぱいあると思うんですよ。だから、さっきも、ちょっとお話に出ていた一冊の本に、僕は魂を揺さぶられたとか、一つの映画に揺さぶられたとかね。僕は、FrontJapan で前田さんと一緒にさせて戴いたから、見なきゃいけない映画リストが、もう、ばあ一つと溜まってばかり

で、もう忙しいんですけど」

一同「(笑)」

水島「なるほど」

石田「もう観たい映画がいっぱいあるんですよ」

水島「ああ」

石田「それで、その中から、また魂を揺さぶられて、自分の行動する背中を押す何かになるかもしれないとかね。或いは、メンターに出会う、凄い影響のある人に会うとか、会いたい人に会いに行くとかね。そういうのって、やっぱり凄く重要だと思うんですよ。

やっぱり、特に本を読むとか映画を観るとか YouTube でも、さっき言った『エドのサバイバル』とかでも何でもいいと思うんですけど、僕は物凄く影響を受けているので…」

水島「うん、うん」

石田「まあ、人に会うとかね」

水島「うん」

石田「そういうのって、やっぱり日本を変えていく凄い原動力になるんですよ。それは、みんな一人一人がそういう色んなコンテンツに触れていくと、魂を揺さぶられると」

水島「うんうん」

石田「で、これのいい例が、あのう、アイスランドの『鍋とフライパン革命』って、前に水島さんにもお話しましたが」

水島「うんうん、話してくれたね」

石田「はい。リーマンショックの直後ね」

水島「うん」

石田「アイスランド国民は、その当時、アイスランド政府とか IMF とか、あと、まあ、そういう奴らと癒着していたアイスランドのメガバンクから、全部、自分らの仕事と資産を失われちゃったアイスランド・ショックに立ち向かう訳ですよ。結局、そこで本当に勉強していない国民とか本を読んでいない国民とかだったら、ああ、我々はもう貧乏になっちゃった、しょうがないなあで動けない国民で終わっちゃおうと思うんですよ。でもアイスランド人は鍋とフライパン革命で動いたんですよ。何処の誰に、どんな責任があるのかというのを、みんなで小さな勉強会がそれぞれあって、チャンネル桜大学とか萌絵大学とか、あちこちに、いっぱいある訳で」

水島「うん」

石田「そういう人達が、みんな普段から勉強していたから、このアイスランド・ショックというのは、政府と IMF と一部の政治家とかも、みんなで結託して、こんな犯罪やっていたんだっていうことを、みんなが気づいた訳。それで国会議事堂の前へ行行って、みんなで鍋とフライパン、カンカン、カンカン、叩いて。その時の犯罪紛いのことをしていた政治家とメガバンクの経営陣を全員、刑務所にぶち込んだんですよ」

水島「うん」

石田「国民が裁判を起こして、その政治家達を刑務所にぶち込んだの。今も刑務所に入っていますよ。それが『鍋とフライパン革命』っていうね、日本では多分そんなニュースを流したら、多分、日本の政治家は都合が悪いから、マスコミは多分、流さないでしょうけどね、それも映画になっているの。『鍋とフライパン革命』」

水島「うん」

石田「それでねえ、それを観て、やっぱり感動するのが、国民達が、いかに一冊の本を読むことが大切なのかっていうことを言っている訳ですよ。結果としてアイスランドっていうのは、国民一人当たりの読書量は世界一な訳ですね。とにかく沢山の本を読んで国を良くしていこうっていう動きが、そこから、どんどん広がって行って、結果として国民の手によってグローバリズムを排除した国って言われているの。でも、それも、ちっちゃな国ですよ」

水島「うん」

石田「人口が34～5万人の小さな国。これを人に話すとね、いや、それは小さい国だから出来るんだよって言う人が居るんだけど、いや、それだったら、もう地方からやっていけばいいじゃないかと。地方の小さな都市からやっていけばいいじゃないかっていうことを言っているんだけど、そこでも、また、出来ない理由とか、もう、そんなのが、みんなから、ぶわあ〜と出て来るから、まずは本を読んで映画を観て、FrontJapanで前田さんから、いい映画を紹介して貰って（笑）」

水島「はい」

石田「僕も観なきゃならないやつが、もう、いっぱい溜まっていますから。ということで、ちょっとコンテンツの重要性をね、この3時間で改めて感じましたね」

水島「そうですねえ」

石田「うん」

水島「うん。さっきコンビニでやっている話をしていましたけどね」

石田「うん」

水島「出会いが少な過ぎるよね」

石田「ああ、そう。出会いもね」

水島「だから映画も本も、或いは、本当に直接、人と会うこととか、色んな奴が居るからねえ」

石田「う〜ん」

水島「本当に、そこは、そういう機会をつくってあげなきゃいけないね」

石田「そうですねえ」

澤村「西部さんなんか、社交が凄く大事だっということを言っていましたけどねえ」

水島「そうですねえ」

澤村「やっぱり、うん、必要だと」

水島「はい、有難うございます。では前田さん、お願いします」

前田「一つだけ言いたいのは、今からの時代っていうのは本当に激しく動く時代になるので、

こういう時に大事なのは、政治家という者に感情移入をし過ぎないということを伝えたいですね。あらゆる政治、政策、物事には必ずプラスのこともあればマイナスのこともある訳ですよ。100%絶対に正しい、善と悪に何かを分けて、こっちを応援するっていうやり方をしてしまうと、そこに孕むマイナス点とか問題点が見えなくなる訳ですよ。

凄く単純なことですけども、感情移入というのは、映画を学問として学んでいる人にしてみれば、分析し尽くされたものであって、僕らは観れば今の演説のやり方は、ああ今、共感を誘おうとしているとか判ったりするんですけど、普通、殆どの人って、そんなことを考えて観ていないので、やっぱり、お勧めとしては一歩も二歩もさがって感情移入せずに、ふう〜んって感じで見るぐらいの感じで判断した方がいいと思います。そうしないとね、やっぱり世の中を分断する流れに自分が渦中に入ってしまうので、それは必ずしも幸せになるとは限らないので、一般の人は、ちょっと離れて見るぐらいで、面白い時代になるんじゃないですかね」

水島「そうですね。はい。では深田さん」

深田「今日、テーマが希望ということで、まあ、この国って希望だらけだなんて思っているんですよ。最悪なのは政治だけで、それ以外は全部、いい国なので、じゃあ、どうやって最悪な政治を変えるのかと言うと、いくらでもやり方があるんですよ。我々って弱者だから、応援している政治家を当選させるような力は無いかもしれないけれども、落選させる力は凄くあると思うんです」

水島「うん」

深田「やっぱり、私は皆さんの応援している政治家に投票するだけでなく、もっと積極的に落選運動をやって欲しいなと思います。もう増税する奴は確実に息の根を止めてやるというね、この強い意志を持って、こいつはザイム真理教の信者なんだとか、段ボールを持って立つとか、色んな落選運動が出来ると思うんですよ。我々国民の意志に反する政治やる奴は、確実に次の選挙で落ちるからなっていう、この気迫を見せて貰いたいなと思っています。

やっぱりね、日本人に多い特徴ですけど、出来ることをやり切る前に絶望しちゃ駄目だと思うんです」

水島「うん」

深田「例えば、それって我々の人生をエレベータに例えると、自分は箱の中に閉じ込められていて、何処にも行けないって悩んでいるのと同じですよ。ボタンを押せば何処かに行くんですよ。でも二階とか三階に何があるか判らないから押すのが怖いって思っているかも知れないんですけど、これを全部、押して、全部、見て確認すればいいと思うんですよ。だから出来ることは全部、やり切って、それでも駄目だったら、そこから絶望しようと思って戴いて、手軽にできることは全部、やって欲しいなと思います」

水島「そうですね。はい、有難うございます。今日は文化の話っていうのは、あまり出来なかったんですけど…」

澤村「うん」

水島「私は最近、石田さんがさっき言っていたアラスカの極北の地で生きているインディアン、アラスカ・インディアンですけど、そういう人達の生活の中で、星野道夫さんっていう人はね、私は今、殆ど読んでいる大好きな作家ですけど、熊に喰われちゃった人なんですけど、カムチャッカ半島でね、でも絶対に銃を持たなかった人ですよ。熊を、ずうっとグリズリーとかやっていたけど、この人が最初の疑問として思ったのは、何故、こんな、極寒の寒い地に、それも不便なのに、このアラスカ・インディアンの集落はあるんだろうと。それで大学の時にお願いして行ってみた。

それで行って見たら、よく解ったって言って、ここの中で生まれて生きて死んで、充分、満足なんだっていうね、そういう世界があるということを書いていてね、これは、やっぱり日本人の縄文時代から始まって、最近、やたらと、みんな、縄文、縄文と言う人が増えちゃったんで嫌なんだけど、縄文時代の人達というのは、まあ、三内丸山遺跡でもいいですけど、そういう空間と時間の中で、そこの中で生きても大きな広がりを含め、空や雲や岩や川や空気まで含めて世界を大きく感じる事が出来た。

こういふことで、私は、さっきアニメの話も出ましたがね、やっぱりイデオロギーと違う時代で、トランプがやっているのは、実はイデオロギーで言っているんじゃないだろうと。それまでの左翼グローバリズム、リベラリズム、イデオロギーでね、ウクライナは、自由の為の闘いだとかね、こういふものじゃないものだろうと。

そういう極寒の地、極北の地で生きている人達の人生っていうのは、充分豊かで素晴らしいものだったっていうね、我々がそういう探検家とか、ああいうのを見た時、やっぱり、何があるかって言ったら、自分と世界が一致しているっていうね、そこの中で息をして生きているっていうこのベースが、私は芸術作品とか映画とかイデオロギーじゃないものの中で、人を変える力があるっていう感じがしましてね。

そういう意味では日本は凄く豊かな希望に満ちた、そういう古いモンゴロイドのユーラシアを渡って地続きのベーリング海峡を渡って南アメリカの奥まで行った、我々の祖先と世界観や自然観が本当に一致している。そういう日本人の姿が、実は八紘一宇ですけどね。

こういふことを、もう一回、子供達に、こんな凄い国なんだ、我々の国の民族は、こんなに凄いんだっていうのを本当に教えてあげたいっていう気がしました。今日は本当に何か楽しい話って言うか元気になる話で、実は珍しいです（笑）」

一同「(笑)」

水島「はい、有難うございました」

石田「はい、お疲れ様でしたあ」

一同「(礼)」

***** お わ り *****